

『明星大学社会学研究紀要』第26号

正 誤 表

頁	箇所	誤	正
1 頁	左段 4～5 行目	<u>銅</u> 直勇教授	<u>銅</u> 直勇教授
5 1 頁	左段 7 行目	①物質的労働	① <u>非</u> 物質的労働
5 1 頁	左段 9～10 行目	pp.143～187	pp. <u>177</u> ～187、 <u>および</u> p.245
7 2 頁	右段 12 行目	<u>S</u> ebastien	<u>S</u> ébastien

上記の通り誤記がありました。謹んでお詫びするとともに、訂正をお願いします。

明星大学人文学部人間社会学科
紀要編集委員会

《論 文》

〈帝国〉—マルチチュード論と〈福祉社会学〉の可能性

渡 邊 益 男

はじめに一課題設定の理由と問題意識—

現代社会としての今日の世界の状況をめぐって、ここ数年、帝国論が各方面で関心と呼ば論議されてきた。とくに、2000年にアントニオ・ネグリとマイケル・ハートの *Empire* が出版されたのを機に、その解説と解釈をめぐって論議が盛んになり、2003年に邦訳が『〈帝国〉』として出版されて以来、一段と熱気を帯びて論議されてきたように思う。その上、当初、その続編が準備されているとのことであったが、まさにその待望の続編が *Multitude* として2004年に出版され、その邦訳も『マルチチュード上、下』として2005年10月末に出版された。今後の論議が注目されるところである¹⁾。

これまで、ピエール・ブルデューやアンソニー・ギデンズ等の「反省的・再帰的社会学」に依拠しながら、福祉の社会学的研究をめざし、現実の福祉の表面で進行している政策、制度および実践に注目しながらも、むしろその裏面で同時に進行している矛盾した現実の問題とその解決の方途如何という問題に強く関心を抱いてきた筆者としては、現実の福祉のこの在り方を基本的に規定している「現代社会」そのものをいかに把握すべきかという、福祉研究の大前提である問題に明確な見通しが見出せないまま手を拱いているうちに、ただ徒に時間のみが過ぎてしまった。福祉の問題もこの世界の人類社会全体の帰趨の問題と深く関係づけながら解かれ

なければならないと考えるからであるが、同時に、その場合には、立場性が不可避的に問われざるをえないからである。もちろん、そうした点でも、とくにブルデューの晩年の何冊かの著書やブルデュー亡き後、その功績を偲ぶ文献・資料から学ぶべきことはきわめて大きかったし、また、ギデンズやベックやラッシュの再帰的近代化理論からも、その後の著書を含め、依然として多くのことを学ぶことができた²⁾。

しかし、今日の世界の状況は、これらの理論だけからでは到底十分には理解しえないような、大変な状況として進行しつつあることを痛感させられて来た。それは、多くのマスコミで大々的に報じられる戦争をはじめとする、いわゆる国際的な事件を通じて感じさせられたことはいうまでもないが、なぜか、とくに我が国のマスコミでは報じられることは殆どなくとも、実は、その裏で同時に、〈帝国〉—マルチチュード論に関して、「もうひとつの世界は可能だ」³⁾ としながら、大規模な国際的な反グローバリゼーションの活動・運動が展開されてきたことを知るに及んで、一層強く感じさせられてきた。一体、この世界的な二つの対立した流れをいかに把握し、それをめぐって交わされている論をどう整理して捉え、今後の展望の中に福祉の理論と実践をどのように関係づけることが出来るかは、当事者性とリフレクシヴィティを不可欠の観点とする〈福祉社会学〉としては、「現代社会」把握の方法のためにまず何よりも先に検討

しておかなければならない緊急の課題であると
考え、本稿の課題に設定した次第である⁴⁾。

とかく、大きな社会的な事件を契機にして、
歴史的な大きな時代の変化が論じられることが
多かった。第二次世界大戦の終結のときはいう
までもなく、ソ連の崩壊によって米ソの冷戦体
制が終わり「歴史の終焉」が論じられたのもそ
の例であった⁵⁾。プレモダンとモダン、モダン
とポストモダンの違い、あるいは、それぞれの
時代の思想の違いが論じられたのも、そうした
事件が切っ掛けになることが多かった。

社会学においては、プレモダンからモダンへ
の移行は、前近代から近代への「近代化過程」
として、長い間、社会学内の様々な分野の専門
的な研究を通じて、一つの大きな研究上の焦点
として研究されてきたが、ポストモダンは、そ
れ自体に概念的な曖昧性が伴っていたこともあり、
また、実証をもって旨としてきた社会学とし
ての現実的な意識からは「実証」の対象にな
りにくかったこともあって、余り好まれなかつ
た嫌いがあったように思う。しかし、それにも
かかわらず、いち早く「脱工業社会論」を主張
したダニエル・ベルの理論をはじめ幾つかの理
論は、ポストモダンの時代の到来を知らしめる
ものであったし、我が国の社会学理論の中にも、
ポストモダンを表題に掲げたり、モダンの脱構
築を正面から論じたり、そうでなくとも、新し
い現代社会の理論を全く新たな視点と方法で展
開するものなどが現れ、注目されてきたのであつ
た⁶⁾。再帰的近代化を主張するベックの場合は、
「近代」が産業社会に見合ったものであるのに
対して、「再帰的近代」はその産業社会を超える
ポストモダンに見合った「リスク社会」とし
て捉えられ、独特の「リスク社会論」が展開さ
れ、今日なお追究が進められている。ブルデュー
もポストモダンを当然の前提として考えながら
理論展開をしていたことは、ラッシュの論じた

通りであつたと思われる⁷⁾。

今日では、そのポストモダンさえ越えられな
ければならないとして、「ポストモダンからハイ
パーモダンへ」を主張する者さえ現れている
のである⁸⁾。

こうした中で、多くの帝国論は、今日の世界
に生起している事態に対する一つの解釈として、
帝国主義的性格を帯びた資本主義の問題からさ
らに進んで、グローバル化した世界の状況を解
き明かさんとするものとして追究されているの
であるが、すでにそこには、多かれ少なかれ今
日の世界に対する危機意識の存在がうかがえる
のである。その危機意識は、余りにも強大なア
メリカの横暴なまでの振る舞いに対してなのか、
現に存在している国民国家の衰退に対してなの
か、あるいは民主主義の危機としてなのか、論
点は様々ではあるが、とりわけ注目すべきは、
マルクス主義の考え方を受け入れつつ、それを
今日的なポストモダンの状況の中で、とくにポ
スト構造主義の系譜に属する諸理論について
構成されているネグリとハートの『＜帝国＞』
論の主張である。しかもそれは理論と実践の統
一的把握がめざされており、『マルチチュード』
論として更なる展開がなされているわけだが、
その上、「世界社会フォーラム」の活動、運動
は、その理論と実践の何たるかをうかがわせる
ものである。

しかし、その主張にもかかわらず、これとは
違った観点からの理論や主張がある上に、これ
に対する批判もあるので、それらを検討し整理
して捉えることもしたいと思う。しかし、＜帝
国＞論の取り扱いには、理論上非常に困難な問
題がある。そこには、ポスト構造主義の理論の
系譜にかかわる思想史的解釈の問題があり、ま
た、マルクス主義の理論とポストモダンの理論
の接合の妥当性をめぐる問題もあるからである。
さらに、その帰結としての将来の「社会」はい

かに構想されるか、また、その正当性を根拠づけるものは何か、などの問題も含まれているからである。

しかし、本稿では、とくに、〈帝国〉—マルチチュード論に焦点づけながら、そうした問題を検討し、真の〈福祉社会〉の追求をめざす〈福祉社会学〉に対して、とくに、その研究の大前提としての「現代社会」把握の方法に対して、それがもつ意味と意義についても論じてみたいと思うのである。

(1) 多様な「帝国」論

歴史上、「帝国」と名乗る国家は古代から現代に及ぶまで数多くあったが、古代ローマ帝国は、その一つの典型とみなされてきた。広大な版図をもち、強大な権力とローマ法による法的規制による支配が実現していたからである。しかし、同時に、その場合、主権の成立の根拠として、見えにくい存在ではあったが、「ホモ・サケル」の存在があったことも決して忘れられないことであった⁹⁾。中世、近世を通じて、帝国はいつも大きな問題であった。そして、近代の国民国家とその間の関係が織り成す世界になっても、また、現代のような世界状況においても、依然として帝国が大きな論議を呼んでいるのはなぜであるか。

少なくともその一つの理由は、資本主義の発展とともに、諸国家間の競争が一層激しくなる中で、戦争と征服によって自国の版図を広げ、新たに加えた他国を植民地として支配する帝国主義をもって自国の発展を目指す国が次々と現れるようになり、まさに、「資本主義の最後の段階としての帝国主義」(レーニン)が、歴史的な緊急の問題になってきたからである。そして、その問題は、第二次世界大戦の終結とともに、国際連合によって世界の平和の実現が可能であるかに思われながら、米ソの冷戦体制下に

おいては、両国の帝國的支配と覇権争いが、世界人類の壊滅の危機を招いてきてしまったからである。さらに、ソ連邦の崩壊後の90年代からは、新自由主義経済理論に主導されたアメリカの新保守主義政権の強大な権力の下で、アメリカの「帝国」としての様相は一層あからさまな姿を現し、恰も世界の国々はその帝国の配下に属しているかの錯覚に陥るほどのアメリカによる世界の政治的、経済的支配が進められてきたからである。とくに、2001年9月11日の同時多発テロ事件以降、アフガニスタンへの攻撃、イラク戦争を通じて、アメリカの帝国主義的行動を批判する論調は激しくなる一方のようであり、また同時に、その帝國的なアメリカを中心とするグローバル化した世界の状況に対する危機感が募るとともに、アメリカ帝国中心の事態に対して反対する運動が、事もあるうにアメリカのシアトルにおいて明確な形をとって表面化し、それ以後、燎原の火の如くにヨーロッパの各国に広がって行ったことも見逃すわけにはいかない大きな出来事となってきたからである。

こうした事態に対して、帝国論は、それを主張する論者の立場を反映し、実に多様であって、その意味するところは様々である。しかし、多くの論で理解されている「帝国」とは、とりあえず、「広大で、複合的で、複数のエスニック集団、もしくは複数の民族を内包する政治的単位であって、征服によってつくられるのが通例であり、支配する中央と従属し、ときとして地理的にひどく離れた周縁とに分かれる」¹⁰⁾ というスティーヴン・ハウに従って理解しておいてよいであろう。すなわち、各国が国民国家として国境を維持しながら存在している状況を前提としつつ、征服によってその国境を越えて版図を拡大し、したがって、そこには多民族が含まれるが、征服した民族と征服された民族は、地理的には相互に遠く離れていることがまあり

うるとしても、中央と周縁、支配と服従の関係におかれる、というのが一般的に共通にいわれる帝国である。それは、強大な軍事大国、多民族支配の国家、海外の植民地領土を保有する国家、世界経済における支配的勢力、という四つの意味を持っているともいわれる¹¹⁾。

さて、具体的な帝国には、その分け方の規準によって様々な表現の仕方がある。たとえば、「陸の帝国」と「海の帝国」(ハウ)、「公式帝国」と「非公式帝国」、「隣接帝国」と「植民地型の海外帝国」(山本有造)、「重い帝国」と「軽い帝国」(イグナティエフ)、「資本の帝国」(ウッド)などである¹²⁾。しかし、多くの「帝国」論は、今日のアメリカの強大な軍勢力を背景とした、その帝国主義的あるいは帝國的な行動に注目し、とくに直接的には、米ソの冷戦構造終焉後のアメリカ一国の世界支配の問題や9.11同時多発テロ事件以降相次ぐ戦争とそれによる世界の状況に対する問題に一定の見解を表明する形をとっているといつてよいであろう。ハーバード大学のマイケル・イグナティエフが「軽い帝国」と定義しているのはそのようなアメリカに対してであり、それは山内昌之も興味深い見方である¹³⁾ というが、単なる興味以上の意義ある研究の結果であるように思う。「軽い帝国」というのは、上記のように、これまでの帝国がいわば植民地と征服の上に建設されたものであるのに対して、現代のアメリカは「植民地を持たない覇権国であり、直接統治の重荷と日々の警備の責任を伴わないグローバルな勢力圏を手に入れた帝国」¹⁴⁾ だからだというのであり、その上、ヨーロッパの諸国は帝国たることから撤退している中で、アメリカ帝国は孤立し、政策の失敗の結果起こっている終わりのなきテロ戦争で脆弱化していくと論じ、アメリカ帝国に追従する国々および国際機関、国際的人道機関の矛盾した行動をも指摘しつつ帝国の問題を論じて

いるものだからであって、注目すべき見解といわなければならない。

多くの帝国論は、帝国とはアメリカ帝国のことを指しながらも、アメリカの帝国主義的性格を厳しく批判するもの(チョムスキー)、その軍事大国としての横暴さを非難するもの(ニューハウス)から、アメリカに対して愛情を持ちながらもそのパワーの乱調振りを憂うもの(マイケル・マンおよびブレジンスキー)、アメリカ帝国主義の行く末を問うもの(ハーヴィ)に至るまで、様々なものがある¹⁵⁾。

こうした中で、アラン・ジョクスの著書とエマニュエル・トッドの著書はとくに興味深いものがある。ジョクスは、アメリカという「帝国」に対して、ヨーロッパの「共和国」を対置させて、ヨーロッパの伝統的な共和国の理念追求の歴史的経験に基づく観点から、近年のアメリカの帝國的な性格の問題性を論じており、それは、アメリカ帝国が混沌の帝国であって、ユーラシア大陸全体の危機をいかに越えるべきかを論じているのである¹⁶⁾。とりわけ興味深いのは、ホブズの『リヴァイアサン』と『ビヒモス』¹⁷⁾における国家の性格規定についての再検討から、「保護者の共和国」という国家のあるべき理念を立論し、社会的共和国による混沌の帝国への抵抗を主張している点である。こうしたヨーロッパ、とくにEUの立場からのアメリカ批判は、ピエール・ブルデューの主張¹⁸⁾ からわれわれには既によく知られて来たことであって、ジョクスの論は、今日のヨーロッパ、とくに、フランスにおいて一般化している見方を代表していると思われるのである。

他方、かつていち早くソ連の崩壊を予言して注目されたトッドは、ジョクスに似てはいるが、観点を異にしつつ、冷戦体制の終焉後ソヴィエト帝国が消滅した後、アメリカはまさに古代ローマのように、世界を支配する強大な帝国にはなっ

たが、それはもはや過去のことであって、今やアメリカは、膨大な貿易赤字を抱え、世界なしにはやっていくことができなくなっているのに、その強大な軍事力によって世界の弱者たる諸国を攻撃している。ロシアは回復しつつあり、ヨーロッパは独立し連帯が進んでいる。そうした中でアメリカは弱体化し、まさに「帝国以後」の在り方が問われている、といった論を展開しているのである¹⁹⁾。ドイツとフランスの連帯、「独仏カップル」の有効性は、ヨーロッパ人全体の感情を表現しているともトッドはいうが、同じ頃、2003年には、所属する国も専門も異にし、考え方にもかなり開きがあると思ってきたジャック・デリダとユルゲン・ハーバーマスが連名でエッセイを書き、驚きと同時に感動を覚え、ブルデュー亡き後の空しさ、絶望感を癒してくれるものであったことが想起させられるのである²⁰⁾。

我が国の帝国論についてみると、たとえば、山内昌之の場合、すでに90年代から我が国における先駆的な帝国研究を進めてきた東京大学教養学部のテーマ講義「帝国論」グループの代表であり、帝国の何たるかをとくに緻密な中東諸国の研究の立場から帝国の歴史的現実に基づきながら明らかにし、今日のアメリカの帝国としての性格についても、共同研究者による様々な帝国の諸相に関する研究を総括しながら論じている。同様の帝国研究は、京都大学人文科学研究所の共同研究「帝国の研究」グループによる、歴史上の帝国を比較の視座においた研究においてもなされている。藤原帰一『デモクラシーの帝国』は、アメリカというデモクラシーの帝国に対して、帝國的秩序を越える道を探求するが、アメリカに対する親近感が強く、国際関係における権力構成に手をつける必要性を説きながら、〈帝国〉の発想はなく、マルチチュード的活動は否定して、結局は、国連を立て直すこと以上

の道は示されないでしまっている。紀平英作編の『帝国と市民』も京都大学の研究グループの研究であるが、アメリカに限定して、内なる民主主義国家と外に対しては帝国たらんとするその二重の相貌を持つ国家としての性格が分析されているところに特徴がある。松本彰・立石博高編の『国民国家と帝国』は、ヨーロッパの諸国民の成立と帝国との関係に焦点づけられた研究であるが、本山美彦編『「帝国」と破綻国家』は、編者自身はアメリカの「帝国」振りとアメリカの攻撃によって破綻された「破綻国家」の問題を論じ、アメリカ自身が「破綻国家」となってしまう危険性を示唆しており興味深いけれども、執筆者の中には、後述するように、新しい帝国としてのアメリカの危機を論じながら、ネグリとハートの『〈帝国〉』に対するひどい理解の仕方には失望させられてしまわざるを得ないものがある。また、斉藤日出治『帝国を超えて』は、「グローバル市民社会論序説」という副題に示されている通り、グローバル市民社会と帝国との関係を論じ、帝国か、帝国主義かを論じつつ、反グローバリゼーションの運動にもふれて、新しい市民社会の在り方を論じていて、これも興味深い論を展開している。それに対して、大澤真幸の『帝國的ナショナリズム』は「日本とアメリカの変容」という副題が付けられているにもかかわらず、書き下ろしは終章のみで、あとは既に古く、その終章さえ、その時既に存在し議論されていたはずの〈帝国〉—マルチチュード論および反グローバリゼーション運動の存在している世界の状況からみると、誤認ではないかと思われる個所が少なくなく、その見解はいささか問題なしとしないのである²¹⁾。

本稿執筆中の今年2006年1月には、帝国に関する2冊の本が刊行されたので、加えておきたい²²⁾。渡邊啓貴著『ポスト帝国』は、帝国と呼ばれるアメリカの位置づけと世界の構造を理解

することを第一の目的にして、一極構造か多極構造かを「二つの普遍（主義）の衝突」と捉えて、むしろ、日本の外交の進め方を論じているもので、理論的関心は薄い印象を受ける。それに対して、山下範久編『帝国論』は、これまでの「帝国」論と＜帝国＞論とが基本的に対立し、激突し、言説間闘争の場となっている今日の状況の中で、＜言説的権力としての帝国＞という問題設定をした上で、一方でその諸相を追うるとともに、他方で「帝国」概念の系譜的分析を行い、「帝国」論の系列と＜帝国＞論の系列を架橋する新しい視座の可能性を検討しつつ、＜帝国化＞する世界システムを分析することによって、国際関係論の専門領域全体が大きく揺らいでいる様を明らかにしている、大変刺激的な本であり、出色の研究として注目に値しよう。

(2) ＜帝国＞の概念と＜帝国＞論の特徴

以上のような「帝国」論に対して、ネグリとハートの＜帝国＞論では、まず、経済的、文化的な交換の抗し難き不可逆的なグローバル化の動きは、市場と生産回路のグローバル化に伴って、グローバルな秩序がつくられ、支配の新たな論理と構造が生まれ、新たな主権の形態が出現しているとみて、＜帝国＞とは「これらグローバルな交換を有効に調整する政治的主体のことであり、この世界を統治している主権的権力のこと」²³⁾を指すとしているのである。つまり、これまで主権国家として存在し、その国家間の経済的ならび文化的な交換を有効に調整するという政治的機能をもつ主体が、改めて＜帝国＞といわれるものとされているのであり、それが世界を統治する主権的権力なのだというのである。したがって、それは、丁度、主権国家が国内の経済的、文化的交換を調整すると同時に統治の機能をもつ政治的役割を果たしているのと同じように、世界を統治している主権権力な

のである。

そもそも主権は、ホッブズの『リヴァイアサン』やルソーの『社会契約論』において、国家や民主主義の成立の根拠とされたものであって、ホッブズの場合は人民と国王との契約において、人民は権利を国王に譲渡し、その代償として国王が人民を保護するとすることによって、絶対主義国家が正当化されたのであり、ルソーの場合は、人民同士の契約関係でその一般意志の譲渡によって代表民主主義が根拠づけられたのであった²⁴⁾。こうした考え方が、今日の議会制民主主義にも多大な影響をもっていることはいうまでもない。国家の主権は、国民国家間の国際関係が織り成す世界を前提にする限り侵すべからざるものであり、多くの「帝国」論もそう考えているといっていよいであろう。しかし、極めて注目すべきことは、ネグリとハートの＜帝国＞の主権権力は、国民国家を超えるものだという点である。この点において、＜帝国＞論は「帝国」論と根本的に異なっているのである。なぜ、彼らはこのような＜帝国＞概念を構想するのか。それにはどんな意味があり、また、どんな意義があるのか。

そうした点を明らかにするために、まずは、＜帝国＞論の特徴についてみておきたい。ただし、後述する論点との関係で必要かつ重要と筆者が思う点のみに限ることをお断わりしておく。

第一の特徴は、前述した規定的表現にもあったように、＜帝国＞は国家単位のものではなく、国家を超える何ものであることである。それは、抽象的であり見えにくい、実際的にこの世界を支配している。その正体を突き止める必要があるが、とりあえず仮説的に＜帝国＞と規定し、類似の表現をとってきた「帝国」や「帝国主義」などと区別する。しかし、それを追究していけばいくほど、実は、歴史的、必然的なその存在と発展の基底にある＜構造＞が明確に

なってくる。そこには、長い間の思想史的な追究の努力の跡も見えてくる。かくて、仮定的な規定は、思想史的裏づけをもって、一段と明確な形で認識できるようになるのであって、このようなポスト構造主義的な論理展開になっているわけである。

第二に、それは、新しいグローバルな主権形態だということである。グローバル化については賛否両論があったが、それはグローバル化の性格をどう捉えるかによっている。しかし、急速に進んでいる今日のグローバル化は、もはや経済の世界のみでなく、社会、文化の領域全般に及んでおり、まさに、ポストモダン状況に見合った形で、世界を席捲し、政治的にも世界を支配している。だから、これをネグリとハートは「新しい主権形態」の出現とみるのである。それは、「国民国家」とは異なり、また、国民国家の主権が衰退し、それとともに国民国家の主権を基として成り立ち国民国家の境界を越えてその主権の拡張を目指す「帝国主義」とも異なるものとして、その姿を現してきているとみるのである。

第三に、この第二の点と関係するが、それは、新しい政体構成だということである。過去の歴史上の政体構成の結果として存在した政体には、君主制、貴族制、民主制、あるいはその混合形態等、様々あったわけだが、＜帝国＞は、民主的政体構成である。アメリカという国が、過去の歴史の中では、原住民の殺戮と簋奪、巧妙な奴隷の差別と支配、など拭い切れない問題があったにしても、形式的には、多民族を包摂しつつ合衆国憲法の下で成り立ってきた民主的政体構成であった点では、＜帝国＞は、アメリカの政体構成の拡張としてあるのである。ただし、＜帝国＞はもちろん、真の民主主義を実現するマルチチュードとの関係で存立するものである点では、アメリカとは異なっている。

だから、＜帝国＞は、脱中心的で脱領土的な政体構成なのであって、国家が国境をもって存立しているのとは異なり、境界を欠く。つまり、その支配には、限界がない。この点も、関連した重要な特徴といっておかなければならない²⁵⁾。

第四に挙げるべきは、その＜帝国＞を支えるものは「マルチチュード」だということである²⁶⁾。これまでの国民国家においても、主権国家とはいうものの、主権そのものは、民主的政体においてはいうまでもなく主権在民であり、国民こそが主権者であるはずである。しかし、国家全体としては、国民はその代表者に権利を委ね、代表者が實際上、政策、制度を作り、国民を統治してきた。それが、ポストモダン状況になると、経済がグローバル化するだけでなく、社会、文化の面でもグローバル化が進み、政治もまたそれに見合った形に変わらざるをえなくなる。つまり、「生政治」にである。経済も「生政治的生産」、すなわち「社会的な生それ自体の生産」と呼ぶものになっていく²⁷⁾。かくて、経済、政治、文化の相互の重なり合いによって、グローバル化した世界を支配する＜帝国＞の力は一層強くなり、循環的、螺旋的に増強していく。

しかし、そうなればなるほど、その＜帝国＞を支える「マルチチュード」の創造的な諸力は、「対抗－＜帝国＞や、グローバルな流れと交換のオルタナティブな政治的組織化を自律的に構築することのできる力」²⁸⁾として発揮されていく。そして、新たな民主主義の諸形態と構成的権力を創出していくことが期待されるのである。ここには、他に例をみない、ネグリとハートの＜帝国＞論と「マルチチュード」論との切っても切れない関係があることが理解されるのである²⁹⁾。

第五に、その他の重要な特徴点を挙げておけば、＜帝国＞は、①規律社会から管理社会へ

の移行を背景の条件にしていること (pp.413~440) ; ②非物質的労働の生産的力動性、ネットワーク権力、などポストモダン状況における労働、情報の問題を含んでいること (pp.209~236) ; ③資本主義的市場は機械であり、それには外部は存在しない、つまり〈帝国〉は非一場であると把握されていること (pp.243~247) などが重要な点として挙げられよう³⁰⁾。

いずれにせよ、ネグリとハートの〈帝国〉論は、主としてポスト構造主義といわれてきた思想の延長上で、それらを現実の社会の可能性把握の方法に展開してみせてくれているということができるのであって、この点を理解するかどうかは、決定的に重要と思われるのである。

(3) 「マルチチュード」論

前述したように、ネグリとハートの〈帝国〉論は「マルチチュード」論と不可分のものであって、『〈帝国〉』の最後は、マルチチュードについても帝國的秩序に対抗する主体として述べられていたのであったが、その後改めて『マルチチュード』が著わされ、詳述されている。それによって、マルチチュードの特徴について、重要な点を挙げれば、次のような点が挙げられよう。(以下では、括弧内に邦訳『マルチチュード』上、下からの引用・参照ページを示す)

第一に、「マルチチュード」論の前提的な観点にかかわることであるが、近代からポスト近代への移行という新しい時代に入ったと認識し、ジンプリチシムス³¹⁾の素朴な目で見るということである (上巻pp.31~33)。ジンプリチシムスの無垢な目は、「残酷きわまりない光景に毒されることなくそれを見すえ、残酷な現実を覆い隠すまやかしをすべて見抜くのだ」 (上p.32) という。

第二に、ネットワーク状の〈帝国〉は、支配的な国家権力だけでなく超国家的な行政機構、

ビジネス業界、数多くのNGOなどを含む (上p.116) が、それに対する抵抗の優位性がマルチチュード論を根拠づけるものであることである (上pp.122~143)。その理由について、非物質的労働が一般化している今日の状況を前提とし、「世界社会フォーラム」を含む歴史上の抵抗の系譜を辿り、ポスト近代における闘争の系譜学的重要性を説き、今日のポスト近代におけるネット型闘争としての反グローバリゼーション運動を例示しつつその限界と可能性を論じ、生権力と生政治的生産とのダイナミックな関係の中で生政治的生産を行うマルチチュードの視点をもった「マルチチュードのプロジェクト」を開始する可能性を示しているのである (上pp.143~167)。

第三に、「マルチチュード」概念は、複数の多様多様な存在であり、「一群の特異性からなる」ものであって、群集、大衆、乱衆といった複数の集合体を指すものと概念的に区別されるものであることである (上p.171)。

第四に、その内容的な特徴として、能動的な社会的な主体だということである。つまり、一般に容認されてきた主権権力に対して、挑戦し、真の民主主義—すなわち全員による全員の支配—を実現する、社会的な主体であるということである (上pp.172~173)。

第五に、それは、〈共〉的な労働主体であり、非物質的労働などによるポストモダンの生産の現実的な〈肉〉であるとされる (上p.174)。

そして、第六に、この「マルチチュードの〈肉〉」が囚われの身となり、グローバルな資本の身体に変質させられるとき、それは資本主義的なグローバル化のプロセスの内部にありながら、それに抗うもの」となり、「グローバル資本という〈帝国〉の権力に立ち向かおうとする傾向」をもち、「やがて〈共〉にもとづく生産の形象を発現させ、〈帝国〉のなかを通り抜け

て反対側へと突き抜ける」と考えられていることである。かくて、マルチチュードは「解放の潜勢力」であると考えられているのである（上 p.175）³²⁾。

以上のような諸特徴とともに、見逃し難い論点を挙げれば、『マルチチュード』上巻において述べられているところでは、①物質的労働の問題（労働の価値をめぐって標準的尺度は見直されなければならないとする見解）（pp.143～187）；②農業生産をめぐるアグリビジネス（「柵の中の工場」）と絶望的な農村の貧困者の問題——農民のマルチチュードとしての自覚とその特異性と共通性を明かすグローバル人類学の意義（pp.195～212）；③貧困の論理（社会全体は「貧者」という形象によって規定されるということ）（pp.216～222）④移民の可能性と「示差的包摂」の問題（pp.222～225）；⑤経済学から生政治的科学への提唱（pp.252～257）；⑥労働の特異的な形象が＜共＞的社会的存在となり、現代社会の中核をなす母体として新しいオルタナティブな社会を創造する潜勢力をもつものであること（pp.260～261）；⑦グローバルな政治体はアメリカではなく共和国でもないこと（pp.264～265）；⑧企業がつくるグローバル化の規準は「政府なきグローバル統治」を創設することにあること（pp.276～277）；⑨グローバル機関の「世界経済フォーラム」とその問題性（pp.279～286）；⑩私的所有権拡大の問題と私有化のパラドックス（pp.291～304）；など、マルチチュードをめぐる基本的に重要な点が詳述されているのである。

また、下巻において述べられている主要な点は、①「マルチチュード」概念はスピノザの示唆によるものであること（pp.13～21）；②特異性の協働としてのハビトゥス的な＜共＞の生産の意味…公私の問題、公共と＜共＞（pp.25～43）；③シアトル以前と以降のグローバルな

闘争の歴史（pp.49～60）；④マルチチュードと時間性および空間との関係（pp.63～67）；⑤マルチチュードと弁証法（pp.70～73）；⑥民主主義をめぐる問題とマルチチュード…主権形態の問題、代表制の問題（pp.77～101）；⑦グローバル世論をめぐる諸理論の批判的検討（pp.117～126）；⑧「白いツナギ」運動³³⁾（pp.127～131）；⑨異議申し立て運動の歴史とシアトルの意義…グローバル・システムの多面的な改革提言（pp.133～218）；⑩マルチチュードの絶対的民主主義と主権の問題…主権の二面性と主権の解消—主権の必要性がなくなること—（pp.219～231）；⑪内在的モデルと意思決定プロセス…マルチチュードの戦略（pp.232～243）；⑫構成的権力と愛の概念—愛と希望の実践—…「もうひとつの世界は可能だ」というプロジェクト（pp.249～264）など、どれ一つといえども見過ごせない論点が詳述されているのである。

ここにおいて、マルチチュード論は、思想史的根拠をもって、現実の主権および民主主義の根本的な問題を問いに付しながら、近年展開されてきたマルチチュード的な運動の歴史的な経験を踏まえ、「もうひとつの世界は可能だ」というプロジェクトを愛と希望によって実現していくプロセスに対して実践的意味を持つ理論であるということは明らかである。したがって、＜帝国＞－マルチチュード論全体に対しても、その背後にある思想上の重要な諸概念の意味およびそれらの諸概念を提起した思想家の思想をどの程度理解し、また、それを現代社会の表層と深層を貫く構造的な動きと結びつけて理論を構築する構想力をどの程度もっているかが決定的に問われることとならざるをえないと思われるのである。

(4) 「世界社会フォーラム」の運動とマルチチュードの実践

1999年11月、シアトルで開かれた世界貿易機関（WTO）第3回閣僚会議の折りに、世界の各地からの労働組合、農民団体、環境保護・人権擁護・国際開発協力などのNGO活動家など7万5000人もものデモによって、国際会議が流会させられたという出来事が起こったことは、一つの大きな切っ掛けとなって、その後の世界を揺るがす運動に発展していき、とりわけ、「世界社会フォーラム」の設立ならびに既に5回にわたる開催によって、世界を巻き込む一大社会運動となって今日に至っている³⁴⁾。

私は、「反省的・再帰的社会学」の研究過程で、とくに、ギデンズの『第三の道』に関係して、第三の道に対するカリニコスの批判書³⁵⁾からシアトルにおける運動について知って以来注目してきた。だから、ブルデューの晩年の著書の中では、とりわけ『向かい火』³⁶⁾は、2000年の来日講演と合わせて、その運動がヨーロッパの運動と連動して、アメリカ主導の市場経済中心主義に対する厳しい批判となっていると理解してきた。しかし、その後、この「世界社会フォーラム」並びにその前後の、まさに現代の生きた歴史的出来事についてその一端を知り、また、ネグリとハートの著書を知って、「世界社会フォーラム」は＜帝国＞-マルチチュード理論の実践版として理解できるのではないかと考えるところから、その活動・運動についても、ここで少しみておきたいと思う。

「世界社会フォーラム」は、いうまでもなく、「世界経済フォーラム」の「新自由主義への対抗フォーラム」としての性格を持っている。「もうひとつの世界は可能だ」というその旗印に即して大きく長期的にみた時、その運動の前史にあたる社会運動は「世界社会主義運動」で

あって、それが第一波であるのに対して、「世界社会フォーラム」の運動は第二波の運動だと考えられている³⁷⁾。しかし、短期的にみれば、60年代後半のラディカリズムの運動がその源流と考えられ、フェミニズム運動、環境保護運動等を経て、その直接的に先行する運動としては、シアトル以前の、メキシコのサパティスタの運動、キューバの新しい革新、インドのナルマダ運動などがあり、また、80年代の新自由主義の経済政策下での「構造調整プログラム」とそれへの反対の高まり、ジュビリー2000の国際キャンペーン、99年6月のドイツのケルンにおけるG7サミット開催時の「債務帳消しを求める」運動等があった。そして、シアトル以後では、2000年9月プラハでのIMF・世銀の合同年次総会への抗議デモ、01年4月カナダ、ケベックでの米州自由貿易地域（FTAA）サミットへの抗議デモ、同年7月のジェノバでのG8サミットに対する抗議デモ、同年12月ブリュッセルでのEU首脳会議に対するヨーロッパ労働組合の反対デモ、さらに03年には、2月15日世界の多くの国々で起こったイラク戦争反対のデモがあり、同年6月には、フランスのリゾート地エビアンで開催されたG8サミットへの抗議デモへと続いていった³⁸⁾。

こうした、反グローバリゼーション運動の続く中で、01年1月、フランスの「ATTAC」（為替取引に課税して市民を援助する協会）が企画し、ブラジルのポルトアレグレで第1回「世界社会フォーラム」が開催されたのである。これまでの5回のフォーラムの開催地とそこに集まった世界からの人々の数は、次の通りだったと報告されている。

- 第1回（2001）ポルトアレグレ、1万6千人
- 第2回（2002）ポルトアレグレ、5万5千人
- 第3回（2003）ポルトアレグレ、11万人
- 第4回（2004）インドのムンバイ、12万人

第5回（2005）ポルトアレグレ、15万5千人であって、会を重ねる毎に発展していることがうかがえるのである。

「世界経済フォーラム」が、少なくとも当初は殆どスイスのダボスで開催されてきたことから、「ダボス対ポルトアレグレ」といわれながら、これと対抗して「世界社会フォーラム」は進められて来た。第一回のフォーラムのとき、ブラジルの諸団体の委員会が起草し、4月に組織委員会を構成する諸団体の承認と採択を得て、6月に世界社会フォーラム国際評議会によって修正、承認された「世界社会フォーラム原則憲章」は、そのフォーラムの何たるかを明確に示している³⁹⁾。それは、14か条から成る簡潔なものだが、それによれば（各条文の番号順に要点のみ記す）、

1. 世界社会フォーラムは、新自由主義、資本主義やあらゆる形態の帝国主義に反対し、人類の間の、ならびに人間と地球の間を豊かに結びつける、グローバル社会を建設するために行動する市民社会のグループや運動体による、思慮深い考察、思想の民主的な討議、さまざまな提案の作成、経験の自由な交換、ならびに効果的な活動を行うためにつながりあうための、開かれた集いの場である。

2., 3. 「もうひとつの世界は可能だ」という確かな宣言のもとに、…オルタナティブを追求し建設する恒久的かつグローバルなプロセスである。

4. 巨大な多国籍企業やその企業利益に奉仕する政府や国際機関が指揮するグローバル化のプロセスに反対の立場をとる。…連帯のグローバル化を世界史における新しい段階として広げること具体化することである。…「すべての市民の人権を尊重し、環境を尊重する。そして、社会的正義、平等、民衆の主権のための、民主的な国際システムや制度を支える。

5. 世界の市民社会を代表することは意図していない。

6. 世界社会フォーラム全体を代表して審議を行うことはない。…提起や宣言について、全体としての採決を求めているのではない。

7. 参加する諸団体ないし諸団体のグループが…決議や行動についての審議をする権利は、保証されなければならない。

8. 分権的な方法にもとづく、多面的で多様な、非宗教的、非政治的、そして非党派的なものであり、もうひとつの世界をつくるために、ローカルから国際的なレベルまでの具体的な行動に従事する諸団体や運動を、相互に関係づけるものである。

9. つねに開かれたフォーラムであり、…党派の代表や軍事組織は、このフォーラムに参加してはならない。この憲章の約束を受け入れた政府の指導者や立法府の議員は、個人の資格で招かれるだろう。

10. 経済や開発、歴史についての、すべての全体主義的・還元主義的な考え方、そして国家による社会統制の手段としての暴力の使用に反対する。…人権の尊重、真の民主主義の実践、参加民主主義、民衆・民族・ジェンダーや人びとの間での平等と連帯のなかでの平和的交流を支持し、あらゆるかたちの支配・統制、そしてある人間がそれ以外の人間に服従させられることのすべてを非難する。

11. 資本による支配のメカニズムと手法について、またそのような支配に抵抗し克服するための手段と行動について、そして、国際的・一国的規模での人種差別、性差別・環境破壊をとめないながら資本主義的グローバル化のプロセスにおいてくりだされている排除や社会的不平等の問題を解決するためのオルタナティブな提案について、熟慮を促し、その熟慮の成果をわかりやすく伝える、思想運動である。

12. 参加している諸団体や運動間の…交流、とりわけ現在と将来の世代のために、民衆の要求を満たし自然を尊重することを中心に据えた経済活動や政治行動のために社会がつくり上げているすべてのものを、重視する。

13. 社会の諸団体や運動の、新しい一国的な、そして国際的なつながりを強化し、つくりだすことに努める。

14. 地球市民権の問題として国際的文脈への積極的な参加に努めることを、また、彼らが連帯にもとづく新しい社会の建設において経験している変革を導く諸実践をグローバルな課題にしていくことを、促進するプロセスである。

これまでの報告書等から知ることの出来た「世界社会フォーラム」の実際は、少なくとも理念的なところはここに網羅されているといっでよいであろう。当然のことながら、実際には、多くの、困難な問題を抱えているようで、厳しい反省や、今後解決していかなければならない課題を忌憚なく述べているものもある⁴⁰⁾。しかし、後述するように、カリニコスやウォーラースティンによって、高く評価されていることは、注目しておく必要がある。

さて、マルチチュードは＜帝国＞に対抗する主体であったのだから、ネグリとハートの理論がこの運動に極めて深く関係するものであることは疑いえないであろう。また、彼らが、その運動に深くコミットしてきたことも、フィッシャーとボニア編の『もうひとつの世界は可能だ』の序文は彼ら二人連名で執筆しており、そこにはその世界社会フォーラムが「マルチチュードの偉大な運動を代表するものである。」⁴¹⁾と明確に述べられ、民主主義のはじまりとしてのマルチチュードの運動の意義が説かれているところからも明らかである。

(5) ＜帝国＞－「マルチチュード」論に対する批判あるいは評価

さて、次に、＜帝国＞マルチチュード論に対する批判または評価についてみておきたい。多くの見解は、『マルチチュード』が出版される前のものであるが、少なくとも『＜帝国＞』においても、とくに最後の方では、マルチチュードの何たるかは述べられている上に、誌上では、幾つかの論文や紹介、あるいは対談の中で議論されてきた⁴²⁾から、その限り少なくとも、すでにマルチチュード論についても知られていたはずである。したがって、これらの批判あるいは評価はマルチチュードを含む＜帝国＞－マルチチュード論に対してのものとみなしてよからう。

まず、ネグリとハートの著書は、とくに抽象的な難しい諸概念をもち、しかも今まで経験したことのないような歴史的な出来事の解明やそれに対する実践的な取り組みに繋がるような理論であるから、それに対する見解には自ずからそれぞれのおかれた立場や研究上のハビトゥスが色濃く反映されていると思われる。そこで、大雑把ではあるが、立場ごとに分けてみていくこととしたい。

第一は、伝統的な「帝国論」の立場の見解である。それらの多くは、アメリカという現代の「帝国」の様々な問題に焦点化して論じているせいもあるが、＜帝国＞－マルチチュード論を「帝国論」の特殊ケースとして、たまたま著わされた理論であるかのように、軽く取り扱っているように思われる⁴³⁾。「帝国」論と＜帝国論＞が厳しく対立し、あるいは対立することになるであろうと考えていることがうかがえるものもあるが、まだ、静観している段階と思われる⁴⁴⁾。しかし、斉藤のように、現代社会がポストモダン的な状況になると、従来の市民社会も「ポスト市民社会」の時代に入ったと認識し、

ネグリとハートの理論を受け入れるとともに、そこでの〈帝国〉の「生政治的権力」による管理社会化に対して、その権力が作動する場でもある市民社会においては、日常生活の組織化をめぐるヘゲモニー闘争が市民社会の主要なアリーナになっているとして、資本や国家が日常生活に介入し、それに飼い馴らされた公共的な組織か、それとも逆に国家や資本に対するオルタナティブとなる公共的組織か、どちらを生み出す市民社会となるかが問われていることを論じ、「帝国」論を超えたところに成り立つ「グローバル市民社会」論を提示している者もいるのである⁴⁵⁾。それは、まさに「マルチチュード」論の焦点の問題の一つであって、その市民社会論の妥当性はなお検討すべき問題が残るにしても、一つの追究方法の道筋を示した点は、示唆に富むものといっていよいであろう。

第二に、経済学理論の立場のものの中には、食わず嫌いで、誤認している場合があるように思われてならない。たとえば、馬場宏二は、アメリカ帝国主義を問題にするあまり、『『帝国』と呼ぶのは、誤導的である』と断定し、それは「社会科学がなにより警戒すべき思想的俗化である」ともいって、「帝国」論（〈帝国〉論を含む）そのものに批判というよりも非難を浴びせており、その脚注の中では、「ネグリとハートの『〈帝国〉』が「諸『帝国』」論中でも代表的であり、きらびやかなレトリックと疑似マルクスの革命論で広くモテたが、歴史的構図がまるでピンボケである。こんな呑気な『帝国』論で、2001.9.11以降のアメリカのヒステリー的破壊行動が説明できるのか。」と述べている⁴⁶⁾。そこには、思想のもつ意義に対する理解がなく、社会科学に生気を吹き込む現代思想の現実的意味を、逆に、誤認しているのではないかと思えないのである。まして、ネグリとハートの著書が広く読まれ、大きな反響を呼んでいることをよく承知

していながら、敢えて、それはなぜかを考えようとせず、また、そのレトリックの意味を繙こうとせず、その生きた歴史的、現実的意義を過去の歴史観をもって葬り去ろうとしているとしか思えない。アメリカの現代帝国主義的な性格の問題性を厳しく批判するだけでなく、教育や福祉の面の問題についても、経済学の立場から極めて示唆に富む見解を示し、啓発してこられた馬場氏であるだけに、真摯な見解が聞けないのは残念というほかはない。

また、村井明彦は、「帝国」論の枠組みをもって「新しい帝国、米国とその危機」について論じながら、〈帝国〉—マルチチュード論の枠組みには依拠しないとして、彼ら（ネグリとハート）は「無用の難解さで自らをアボリアに追い込んでしまった」とか、「社会科学の分析概念は、経験的事実を説明すべきであろう。…空中に『概念』を築く試みには賛同できない」というのである⁴⁷⁾。難解なのは理論よりは現実の方であることを忘れ、理論の難解さを非難する。一体、彼のいう「経験的事実」とは何なのか。「腹立たしき社会的事実」（ダーレンドルフ）もあるではないか。そうしたことを無視して、ただ自分の見える経験的事実を説明するのみという社会科学は、疾うの昔に清算されたのではなかったか。今は、見えないでしまった、あるいは気がつかないでしまった、表層の社会的事実の裏にあるいはその底に存在しているもうひとつの社会的事実をも確認し、どちらの経験的事実も正当に捉え、さらに、ただ説明すれば事足りるという研究方法の在り方をそのものを根底的に批判して、やはり、実践的理論の構築、そして理論実践を進めるというリフレクシヴィティの方法こそが要請されているのではないか⁴⁸⁾。そのためにはどんなに難解であろうとも、徹底的に読み込まねばならない。そうすれば、空中に概念を築いたなどとは到底いえないことがわ

かるであろう。まして、「マルチチュード」の
実践や「世界社会フォーラム」の運動の事実を
少しでも知れば、益々そう思えるであろう。し
かし、後述するように、多分、「普遍経済」の
問題が重くのしかかっていると思えば、とくに
若手経済学研究者に対しては、この失望感にも
かかわらず、その点の経済的問題の解明にぜひ
とも期待をしたいと思うのである。

もちろん、すべての経済学的接近が上述の両
者のような見解になるのではない。たとえば、
後述するように、スラヴォイ・ジジェクの著書
や論文を訳したり、ハートとの討議では、先端
的な現代思想について実に該博な知識をもって
真摯に取り組み、その鋭い質問をハートに突き
つけながら重要な意味を浮かび上がらせて、わ
れわれを啓発してくれている長原豊も専門は経
済学である⁴⁹⁾。内橋克人もそうである。

第三に、社会学からの批判・評価については、
西原和久の極めて的確な書評があり⁵⁰⁾、そこか
ら示唆されるものは少なくないが、ここでは、
川原彰の分担執筆論文をみておきたい。川原は、
『マルチチュード』(原書)の出版される以前で
あるにもかかわらず、マルチチュード論に関し
てグローバル・デモクラシーの観点から論じて
おり、「政体構成的権力」としてのマルチチュー
ドの有する潜勢力の理論化が、国民国家や資本
から相対的に自立しており、活動状態にある絶
対的なデモクラシーの発現としての、国境を越
えて成り立つグローバルな市民社会にとってい
かに重要かを論じている⁵¹⁾。その論旨は、ネ
グネとハートの＜帝国＞論に沿った研究の進め方
を示していて、学ぶところが大きい。また、川
原は、別の共編著の中でも、「＜帝国＞とグロー
バル・ガバナンス」を論じた章の中で、＜帝
国＞論を政体構成的プロジェクトにおけるマル
チチュードの視点から解読することを目指し、
ハートのいう「WTOやIMFなどのような国

民国家の枠を超えた経済組織や、G 7に代表さ
れる主要な国民国家(経済)、また多様なNG
Oや主だったトランス・ナショナルな大企業が
一体となって機能する、中心なきネットワーク」
としての＜帝国＞的パラダイムは、「グローバ
ル・ガバナンス」は可能であるかという問題構
成と共有する議論だとし、それは、＜帝国＞と
いうグローバルな権力機構に対するもう一つの
「全体的秩序」としての「政治的欲望」を最終
的に浮かび上がらせていると論じている。そし
て、それは「グローバル・デモクラシー」への
欲望にはかならないとし、したがって、ネグリ
とハートの『＜帝国＞』は、＜帝国＞的な政治
空間における「グローバル・デモクラシーの政
治理論」に向けた試論を提出したものとして再
構成することができると述べるに至っている⁵²⁾。

そのように再構成できるものかどうかは定か
ではないが、少なくとも、『マルチチュード』
がまだ出版されていない段階でのことであり、
したがって、その解釈に限界があったにしても、
既にそこにいわれる政治理論を構成する中心概
念はマルチチュードであるとし、＜帝国＞に抗
するマルチチュード構築に向けて論を進める必
要性を説くネグリとハートの理論に即した妥当
な解釈の上で示唆に富む論といえよう。

しかし、『マルチチュード』の出版以降になっ
ても、果たしてマルチチュードのつくる世界が
「グローバル・ガバナンス」といわれるものか
どうかは依然として定かでない。「政府なきグ
ローバルな統治(ガバナンス)」が、企業がつ
くるグローバリゼーションの規準によるものだ
とすれば、マルチチュードはそれとも対抗しよ
うとするものではないかと思われるし、マルチ
チュードが実現しようとする絶対的民主主義が、
ガバナンスと矛盾しないかどうかははっきりし
ないからである。また、マルチチュードを代表
する「世界社会フォーラム」の今後の理論と実

践の発展経過を見なければ、それがグローバルな市民社会を形成していく潜勢力であることを現実的根拠をもって示すことは難しいであろうからである。

なお、世界システム理論のウォーラスティンは、時事評論の形ではあるが、「ダボス対ポルトアレグレ」の問題として、「世界経済フォーラム」と「世界社会フォーラム」の対立状況を問題にし、「世界の政治的中心の姿勢が、大きな不確実性を前提としはじめた」として、「ポルトアレグレの諸勢力が懸命に努力しさえすれば、次の10年には、すばらしい力を発揮するはずである。」と述べて、「世界社会フォーラム」の運動に期待を寄せている⁵³⁾。

第四に、社会科学の領域、あるいは政治学の領域からの批判について、とくに、まだ邦訳が出版されたばかりの『新世界秩序批判』の中から、二人の見解を取り上げてみておきたい。

まず、ジョヴァンニ・アリギの場合は、すでにネグリとハートの『＜帝国＞』の中心テーマである平滑空間としての帝国という観念について、その空間の平滑さ（流動性）の点と労働と資本の移動に関する実態からいって、その理論の経験的妥当性が不十分であることを指摘しながら、ネグリとハートが「帝国主義の諸限界」を論じている中で自分の「周期論」を取り上げて批判的に述べている（『＜帝国＞』 pp.310～312）のに対して、反論している。そして、マルチチュードのプロジェクトに対しても、たとえば「市民権収入」にたいしても批判的であり、結局、「帝国は実際にその発生がとらえうるかもしれない。しかし、たとえそうであったとしても、帝国が実現したか、あるいは挫折したか、実現したとしても社会的、文化的実質が存続するのかどうか人類がわかるようになるまでは、あと100年、それどころかもっとかかるであろう。」⁵⁴⁾と述べるに至っているのである。

確かに、＜帝国＞の存在を経験的に確かめることも重要であろうし、それが確かめられなければ、多くの人を納得させることが出来ないに違いない。しかし、たとえば、移民の量は20世紀よりも19世紀の方がはるかに多かったとするアリギの計算の仕方に妥当性があるかという問題も避けられないであろうし、それ以上に、＜帝国＞論のもつ意味は、量よりは質を重視し、量的には今は少なくとも時間的経過とともにその拡大の可能性がある時、その可能態を突き止め、未来の展開に繋いでいくところにあるのではなかったか。そういった意義までアリギは批判しているわけではないようであるけれども、100年もかかるというわけである。われわれはアリギ自身の周期論の限界もまた見逃さずに、検討を進めなければならないであろう。

次はヨアヒム・ヒルシュの場合である。ヒルシュは、「20世紀末のフォード的資本主義の危機に続いて生まれた新自由主義的なグローバリゼーションの攻勢によって、諸国家と国家システムの際立った変換がもたらされることになった。」として、「アメリカがフォードイズム危機の後に再び獲得した支配的立場というものは、国際的な活動を増しつつある資本が生産関係と階級関係の再構造化に関する利害を貫徹する運用手段」なのであって、「このような発展によって国家の諸装置の転換」がおこなわれたのであるが、「その転換は国家の諸装置の互いの位置と制度化された階級関係のあり方を根本的に変えるもの」で、この過程は「国家の国際化」と呼べると主張しているのである⁵⁵⁾。そして、その国家の国際化の次元として、①国際資本市場と金融市場への個々の国家の諸装置の依存の強化、②国家の脱ナショナル化の過程、③個別の国家レベルと国際レベルでの政治の民営化の推進、④政治上のルール作りが全体的に、形式化された国際組織やインフォーマルな「体制」

という形で次第に国際化されるようになること、の4点を挙げ、一方で、強力な国家の共通の利害を組織化し、代表している国際通貨基金、世界銀行、OECD、WTO等といった国際組織の重みが増すことになったことと、他方で、階級関係が著しい変化を蒙り、フォーディズム的コーポラティズムの廃止や崩壊、国家と階級との関係が複雑になることなどの状況を指摘し、こうした国家の転換過程の結果、個々の国家の自由民主主義的な制度が次第に空洞化していき、代議制民主主義機関は、代議制の構造的危機にさらされることとなることを指摘しているのである。そして、今やグローバルな権力関係は、アメリカ、EU、日本という資本主義の「三つの柱」と、さらに従属している周辺との対立によって規定されている、という。しかし、それにもかかわらず、「世界資本主義の貫徹は、独立した経済的過程ではなく、国家によって組織された権力を基盤としている。」と強調し、まさに、国家の国際化として把握すべきことを主張しているのである。こうして、ネグリとハートの「マルチチュード」の概念は、ポピュリズムの構造を想起させるものだとして、「世界の現状とその構造とダイナミズムと行為主体とがしっかりと把握されるのが焦点となる。」と結んでいるのである。

ヒルシュの論は、現実的で説得力をもっており、その見解は極めて重要に思われる。しかし、だからこそ、あくまでも国家の主権を基盤にする国際組織やインフォーマルな体制の行動の結果がもたらしている構造的な問題に対して、ヒルシュが「国家の国際化」として見ているのと同じ世界状況を「帝国」として捉えるとともに、その論理的帰結であり、必然的な前提的存在である「マルチチュード」を主張するネグリとハートの理論の意味と意義があるのであって、その重要性は益々大きいように思われるのである。

その理由の一つは、中国が急速な発展を遂げている上に、最近では人民元の参入が間近いとされている中では、早晚、資本主義の「三つの柱」は崩れる可能性があり、中国の存在を考慮しないわけにはいかないであろうからである⁵⁶⁾。

第五に、思想の領域からの批判あるいは評価についてであるが、非常に多くのものは、高く評価していると思われるが、現代思想の中には厳しい批判もある。ここでは主としてマルクス主義の立場と現代思想の立場からの代表的なものについてその概略を記すにとどめたい。

まず、著名なヨーク大学のアレックス・カリニコスは、ギデンズの『第三の道』に反対しつつ、前記の著書に続いて出された著書で、ブルデューはじめネグリやハートを評価し、「世界社会フォーラム」の第一回と第二回のポルトアレグレおよびその前後の反グローバリゼーションの運動に対しても高く評価している。そして、トービン税の導入やベーシック・インカム制度の導入、移民規制の廃止、市民権の拡大などを主張し、反資本主義マニフェストとして、「もうひとつの世界は可能だ」に貢献しようとしている⁵⁷⁾。このカリニコスに対しては、村岡は、多様性を強調しながら、その点でのマルクスの弱点に目をつむってマルクスをもちあげるマルクス教条主義であるといって、カリニコスを批判している⁵⁸⁾。しかし、それは、まさにマルクス主義とポスト構造主義の思想をいかにつなぐことが出来るかという問題を表わしているのであって、カリニコスは、むしろその努力をしているのに、村岡の方が偏見に囚われているのではないかと思われてならない。

次に、神奈川大学の公開講座の記録である『「帝国」を考える』の編者、的場昭弘の場合である。的場は、ネグリとハートの『「帝国」』を解説しつつ、「マルチチュードは世界をかく乱する移民労働者である」とか、「ネグリはア

メリカという〈帝国〉をほめ殺しにしながら、じつは批判している」とか、『〈帝国〉』というのは、本当に難しい本です。難しい理由は、ただひとつ。使っている言葉が難しい。」といい、また、「ところで『〈帝国〉』というのは、ポストモダンの本なのではないでしょうか」と問いながら、「新人類といわれている浅田彰は、ポストモダンを紹介したといわれていますが、その理解の仕方は間違っていました。」といい、ネグリについては「彼はポストモダニストだといわれましたが、彼の『〈帝国〉』はポストモダン批判なのです」と解説している。その上、最後には、『〈帝国〉』のポイントのひとつは、「(巨大な利益や生産力を) みずからの豊かさを実現するために労働者が取り戻すことは重要ではない、という点です。」…「儲けようとするような行動を全部止めてしまい、発想を元に戻してしまおうというわけです。… ようするに、非労働の世界をつくらうというのです。…非労働のすすめです。」と解説しているのである⁵⁹⁾。

なんとも、おぞましきさえ覚えさせられてしまう解説である。私は、的場が非難する浅田彰の『構造と力』を徹底的に何回も読んで理解することから、その脚注に出てくる文献を片っ端から読む努力をして、ポストモダン、ポスト構造主義を理解してきた。だからそれは私にとっては、かけがいのない重要な参考文献であった。だからそれに対する高い評価⁶⁰⁾も当然のことと思ってきた。その浅田の著書を誤認し、『〈帝国〉』についても、「ポストモダン批判」だとか、非物質的労働のことだと思うが、「非労働のすすめ」だとかと間違った解説をするのは、一体どこから来るのか。マルクス主義者の中にはこんなに偏見に囚われている人がいることは残念でならないし、大学の公開講座がもつ影響力を考えれば、大学の在り方が問われているように思えてならないのである。

最後に、現代思想の立場からの代表的な見解として、「欧州を代表する哲学者」といわれ、アメリカは民主社会の対立物である新しいタイプの「緊急事態国家」になりつつあるといった⁶¹⁾ スラヴォイ・ジジェクの厳しい批判についてみておきたい⁶²⁾。ジジェクは、『〈帝国〉』でいわれている現代のグローバルな資本主義はもはや民主的な代議制とは相容れないとし、ネグリとハートのいう「絶対的民主主義」に対して、①本当に非物質的労働がヘゲモニー的な役割を掌握するといった移行を生産からコミュニケーションへ、生産から社会的相互行為への移行として説明できるのか、②生産が直接に新たな社会関係を生産するといったこうした生産の「政治化」は、いったい政治概念にどのような影響を及ぼすだろうか、③民主主義は、その必然性から言っても、またそのまさに概念構成から観ても、非-絶対的ではないのか、という三重の問題があるとし、マルチチュードはさらなる一連の問題を曝け出すことになる、というのである。そして、「集中する超越的な〈国家権力〉に、それに内在するマルチチュードの顛覆的な力を単純に対置することなど、不可能なのだ。」といい、さらに、反グローバリズム運動に対しては、ネグリとハートの見方とは違って厳しい見方をし、「抵抗としてのマルチチュードとしてだけではなく、権力の座に就いたマルチチュードとはいかなるものなのか」と問題を提出しているのである。ジジェクは「ひとたび多数性(マルチチュード)が自分たち自身が権力の座にあることに気がつけば、ゲーム・オーバーである」という。それは、サバティスタの運動の中でのマルコスのとった行動に関するナオミ・クラインの記述に基づきながら述べていることに注意しなければならない。しかし、いずれにせよ、そうしたマルチチュードは今日のホモ・サケルの時代においては法-外において

自己一組織化された集合性という傾向をもつより他ないであろうとして、そうした法外の人びとの集団が出現するたびに、それが権力の座にあった者たちによって「ドラッグの政治」として、ドラッグによって即座に崩壊の憂き目に遭うという問題をも提出しているのである。こうして、ジジェクは根源的な曖昧さを心に刻みつけるべきだと厳しい指摘をして終っている。

ジジェクがこの論を展開している『身体なき器官』は、ネグリとハートが依拠していた思想家の一人であるジル・ドゥルーズの思想のもうひとつの側面、すなわちドゥルーズの中のヘーゲルとは異なりつつ、ヘーゲル的な側面を抉り出すことを主要な狙いとするものであって、ドゥルーズ＝ガタリの『アンチ・オイデプス』の核心の概念である「器官なき身体」を敢えて顛覆させた題名が与えられているのである。このこと自体が注目されるべきことであるが、そのジジェクの提出している問題は、確かに、過去のマルチチュード的な集団・組織の持っていた問題からみれば尤もなことに思われる。しかし、「マルチチュード」はそれにもかかわらず、生成発展していくものとしてあり、絶対的民主主義と代表制の問題も、極めて民主的な実践の過程で進めていくことになっているし、またそうすべきもので、まさに「エチカ」としてあるものだということと、世界社会フォーラムの活動こそが最も注目しなければならないと思われるのである。したがって、ジジェクの批判に誠実に応えられるようにしていくことは極めて重要ではあるが、そのためにネグリとハートの理論の意義が減ずるものでは決してないと思われるのである。むしろ、ジジェクはその理論を支持し、強化していくために、敢えて苦言を呈していたようにも見える。実際、ジジェクは他のところでは、世界各国各地域におけるスラムの住人の爆発的な広がりについて論じ、「難民以上

にホモ・サケルであり、組織的に生み出されるグローバル資本主義の『生きる屍（ゾンビ）』である」といい、また、経営者、ジャーナリスト、広告代理店の人間、学者、アーティストなどのような新たに生まれてきた「象徴階級」とは全く反対に位置する階級であり、この両階級の成立は、「階級闘争の新しい軸線なのだろうか？ それとも『象徴階級』が内在的に裂け目を孕んでいるために、スラム住人と象徴階級の『進歩的な』部分との連帯に人が解放への賭けをすることができるのだろうか？」と問題を提出し、「われわれが見るべきは、スラム共同体から生じるかもしれない新しい形の社会の認識〔気づき〕の徴候である。それこそが、未来の萌しであろう。」と述べているのである⁶³⁾。

ネグリとハートのいう「マルチチュード」の具体的な形象は、移民労働者はじめ貧困者、農民、そして下層労働者、それに福祉の当事者等々としてあると思われるが、ホームレスの人々、スラムの住人ももちろん含まれるであろうから、ジジェクのここでの論は、まさに「マルチチュード」のことに他ならない。その考え方もネグリとハートと殆ど変わらないように思われる。とりわけ、本稿(1)でも触れた「ホモ・サケルの時代」としてそのもつ具体的な意味も明らかであり、最後の新しい形の社会の認識が未来の萌しであろうとするところは、ネグリとハートの〈帝国〉－マルチチュード論における思いと共通の思いとみることができよう。

(6) 〈帝国〉－「マルチチュード」論の思想的根拠

沢山の論点がありうるが、ここでは、とくに、そこで使われている諸概念のポスト構造主義およびマルクス主義の思想史的系譜の問題と、マルクス主義とポスト構造主義との接合の問題に絞って、その概略を記すにとどめることをお断

りしておく。

ネグリとハートの『〈帝国〉』および『マルチチュード』に使われている諸概念は、マルクス主義およびポスト構造主義の思想史的系譜の中で使われてきたものが非常に多い。そもそもネグリとハートは、「二つの学際的なテキストが、つねにモデルとして私たちの役に立ってくれた。マルクスの『資本論』とドゥルーズとガタリの『千のプラトー』がそれである。」⁶⁴⁾と述べ、マルクス主義とポスト構造主義のどちらも重視しながら思考を進め、その成果が『〈帝国〉』であることを示していた。しかし、基本はポスト構造主義で、軸足の比重はそちらの方に多くかかっているように思われる。それは、現代の状況に見合った形で展開するために当然のことであろう。しかし、同時に、基本的にマルクス主義を受け入れ、ただ受け入れるだけでなく、その諸概念を現代にも通用する形に捉え直しながら、ポスト構造主義の考え方に繋ぎ、ともに、強化していこうとしたのではないかと思われるのである。それは、『千のプラトー』もさることながら、その前のドゥルーズとガタリの『アンチ・オイデプス』も、またそれ以外のドゥルーズの著書や、さらにフーコーの著書等から引き継いだと思われる考え方が少なからず見られるからである。まさにドゥルーズとガタリが『アンチ・オイデプス』でいう「接続的総合」の正当な使用、「離接的総合」の内在的使用、「連接的総合」の遊牧的使用をやっていると思われるのである⁶⁵⁾。

ネグリとハートは基本的に差異、多様性を認め、「機械」概念を使用し、マルチチュード＝多数性の「潜勢力」を高く評価する。周知のように、ドゥルーズの哲学は「差異の哲学」ともいわれて、「差異」の概念はその出発点をなすものであった⁶⁶⁾。また、『アンチ・オイディプス』は資本主義の分析をその最も深い次元の無

意識の領域に関するフロイトの理論を根底的に批判しながら展開してみせたものだが、その際、「欲望する機械」としての人間の、最も深い層での自然との〈共生〉を可能にする捉え方を、「諸機械」概念をもって綿密に分析し、根源的な「器官なき身体」の把握の境地に辿り着くこと、そして、そこから逆に追いついて社会の構造を捉え直していく道筋を明らかにしていくという、極めて難しいが、しかし、それだけ重要な、優れた大著であったと思う。そして、その論理の延長上で、歴史的唯物論ともいわれるポスト・モダンの哲学を『千のプラトー』において展開し、多くの多様な理論の系譜を辿りつつ批判し、その際、リゾーム、アレンジメント、抽象機械、強度、生成変化、リトルネロ、ノマッドと平滑空間、平滑と条理、潜勢性、現勢化などのポスト構造主義的思考にとってのキー概念を明らかにしつつ、「管理社会」およびそれに対する対抗実践を示唆していったのであった。さらに、「管理社会」は、フーコーの「規律社会」に対して、「規律社会から管理社会へ」という主張であって、一般的にいわれ議論されてきた管理社会とは異なる「管理社会」としての現代社会の特徴を示したのであった⁶⁷⁾。さらに、加えて、ドゥルーズによる『フーコー』および『スピノザ』も忘れられない研究であり、フーコーとはお互いに好敵手でありながらいかに親交が深く、よく理解し合っていたかを知らしめられるとともに、思想の系譜的継承の大切さを知らされるのである。そして、その優れたスピノザ研究も、現代になってなぜスピノザが焦点化されて研究されるのかが理解できることとなるのである⁶⁸⁾。

こうしたドゥルーズの思想が、ネグリとハートの『〈帝国〉』と『マルチチュード』に流れ込んでいることは、その行論の至る所で知ることが出来るのであって、本稿で上述した主な内

容はもちろんその一部でしかない。

次に、マルクス主義の基本概念である弁証法の問題およびマルクス主義とポスト構造主義の接合の問題を取り上げてみていきたい。

周知のように、マルクス主義の理論の立場は弁証法的唯物論であり、方法的には唯物弁証法であって、弁証法こそヘーゲルからフォイエルバッハを経てマルクスが継承し、マルクス主義の「脊髄」といわれて、その思想が生きた思想であることを保証するものであった⁶⁹⁾。それに対して、ポスト構造主義の諸概念は、到底マルクス主義と接合できるとは思えないようなものに思えるのである。それにもかかわらず、ネグリとハートが両者を接合しながら論を進めようとするのはなぜか。それは、まさに、弁証法の問題に他ならない。

弁証法といえばヘーゲルであって、ネグリとハートの「マルチチュード」概念や「絶対的民主主義」が由来する源であるスピノザは、ヘーゲルとは相容れない哲学者だったというこれまでの一般的な解釈を、ドゥルーズ、アルチュッセル等によるスピノザ研究は、大きく変えてきたのであった。ピエール・マシュレによれば、ヘーゲルにとってスピノザは弁証法を根底から脅かす存在であったにもかかわらず、スピノザとヘーゲルの関係は、最大の敵かつ最良の友であったという。そして、その両者の対立かつ接近という両義的な関係が分析され、新たな弁証法が提示されたのである⁷⁰⁾。マシュレは、ネグリのスピノザ研究は型破りの研究だというのが、ネグリ自身がスピノザの主著『エチカ』や『政治論』の詳細な読解から得た永遠なる「民主制」としての「絶対的民主制」概念を導出する過程に見られるのは、いかにスピノザの論理が弁証法的に展開された結果であるかが明らかにされているのである⁷¹⁾。とくに、人間の場合、死の経験がもたらすものは「変容」であり、「積極

的かつ構成的な変容」であって、「変容の弁証法およびそれによる切断」によって、それにもかかわらず存在し続ける諸情動の善き弁証法によって、民主制は、構成的権力=能力というよりも構成的力となるのであり、それは現勢的力なのであって、変容または「永遠なものへの生成変化」という社会的活動性に他ならない、と帰結されているのである。これをもってネグリとハートが＜帝国＞—マルチチュード論の基本としたことは、了解されるであろう。絶対的民主制は、すべての政体の規準となる理念的なものであるとともに、永遠に実現に向けて歩まねばならないが、マルチチュードの構成的力は、その実現の第一歩と考えられるわけである。

なお、初期マルクスの「ヘーゲル国法論批判」は、ヘーゲルの『法の哲学』のうちの国内法を徹底的に分析する中からヘーゲルの弁証法の観念論的性格を剔抉したものであったが、政体の分析においては民主制がいかにすべての他の政体とは異なり、その基礎としての理念型的な政体であるかを明らかにしているのである⁷²⁾。スピノザの捉え方もこれと極めてよく類似しているのは、ともに弁証法的な分析と論理の進め方によるのではないかと思われる。ならない。

なおまた、プロレタリアート概念について触れておくと、これも初期マルクス以来、マルクス=レーニン主義に欠かせない重要な概念であった。『＜帝国＞』と『マルチチュード』においては、「マルチチュード」は「新しいプロレタリアート」ともいわれ、新たな主権に抵抗する社会的な主体として、やがて主権などという必要性がない状況を目指して活動する、すなわち、真に民主主義を樹立していく新しい人類の創造のための愛と希望の実践をする主体であった⁷³⁾。この場合のプロレタリアート概念は、明らかにいわゆる労働者階級よりも広く捉えられているわけで、それは、まさに、初期マルクスの「ラ

ディカルな鎖をつけた一階級」であって、「己れを社会の爾余のあらゆる圏から解放することなしには、したがって社会の爾余のあらゆる圏を解放することなしには、己れを解放することのできない圏であり、一言にして尽くせば、人間の全き喪失であり、それゆえにただ人間の全き取り戻しによってのみ己れ自身を獲得しうる圏である。社会のこの解消が一つの特異な身分として存在するのがプロレタリアートにほかならぬ。』⁴⁾と規定された概念そのものではないであろうか。あるいは、同じく初期マルクスの「現実的な個体的人間が抽象的な公民を己れがうちへ取り戻し、個体的人間として彼の経験生活のなかで、彼の個人的労働のなかで、彼の個人的境遇のなかで類的存在者となったとき、人間が彼の『固有の力』を社会的な力とみとめてこれを組織し、したがって社会的な力をもはや政治的な力の姿において己れから分離することをしないと、このときにこそはじめて人間の解放の成就があるのである。』⁵⁾という人間の解放とマルチチュードの実践は、殆ど変わらないもののように思えてくる。

もちろん、初期マルクスのこれらの論文が書かれ、『独仏年誌』に掲載された1843年の状況と「スペクタクルの社会」とか「液状化する社会」⁶⁾ともいわれるポストモダンの現代社会の状況の違いは大きい、それにもかかわらず、初期マルクスと＜帝国＞－「マルチチュード」論とのこの類似性は何を物語っているのだろうか。それは、ともに弁証法的な思考方法に拠ったからではないだろうか。

ここで、ネグリと同じように、労働者たちと活動し、投獄された経験ももっているバオロ・ヴィルノの見解についてみておきたい。ヴィルノは、マルチチュードがポストフォードイズムの資本主義と密接な関係にあることを10のテーゼをもって示している⁷⁾が、そのなかに、「マ

ルチチュードは自らのうちに労働社会の危機を映し出している」「ポストフォードイズムのマルチチュードによって、労働時間と非労働時間との質的な差異は消失する」「ポストフォードイズムの労働力の総体は、もっとも未熟練とされるものも含めて、知的な労働であり、『大衆知力』である」「マルチチュードは『プロレタリア化の理論』を埒外におく」という4つのテーゼが含まれている。労働社会の根本的な変化の中で、主体的な力を持ったマルチチュードが、労働自体の変容に対応するものとして現われたが、大衆知力といわれるのは、「労働との関係ではなく、生活諸形式の平面において、文化的消費の平面において、言語活動的習慣の平面において、見い出されるもの」だといい、「生産がもはやアイデンティティ形成の特殊なトポスではいかなる意味でもなくなるまさにそのときにこそ、生産はまた自らにおいて言語活動的諸能力、倫理的諸傾向、主体性のニュアンスのすべてを包括し、経験のすべての局面の上に自らを投射することにもなるのです。大衆知力はこの弁証法のなかにあります。」と述べて、大衆知力を持ったマルチチュードの何たるかを明確にしているのである。したがって、ヴィルノはプロレタリア化の理論は頓挫するとみているのであり、大衆知力に応じた概念的移行の必要性を主張しているのである。

プロレタリア概念をどう規定するか、あるいはどう規定されたプロレタリア概念をもって現代の問題を考えていくかによって、当然違いはあるにしても、マルチチュードの持つ「大衆知力」とはよく言い得ており、それは、広範な人々を含みながら、考えながら行動する、行動しながら考える、理論と実践を統一せざるを得ない存在であることを示していて、少なくともそのプロセスにおいては、初期マルクスの人間的解放およびその担い手としてのプロレタリアート

の規定との論理的な相同性が認められると思うのである。

これは、あくまでも仮説的な解釈であるが、より確かな解釈にしていくためには、とくに、ドゥルーズの「器官なき身体」という核心の考え方に対して、スラヴォイ・ジジエクが『身体なき器官』において主張した問題提起を正当に受け止め、ネグリ対ジジエクの問題が、すなわち、全体的ドゥルーズ主義をめぐる問題が追究される必要があると思われる。そこには、ジル・ドゥルーズの理論に内在していた二つの視点の統合の問題があるのであって、それは、マルクス主義の伝統の復興という問題に関係するもので、まさに弁証法の問題なのだからである。しかし、もはや紙面も大幅に超過してしまったので、それは他日を期したいと思う。ただ、ここで、次のことだけ付け加えておきたい。

このマルクス主義とポスト構造主義の接合が完成した時、そのときはじめて武藤一羊もいていた、資本主義システムを乗り越える運動の第二波の命名がなされることとなるであろう。ポスト資本主義という問題構成は、英国でも (Calinicos) アメリカでも (Martin & Torres) 考えられていることは確かである⁷⁶⁾。

要は、人間の主体性にかかっていると思われる。「神の死」、「人間の死」がいわれて久しいが、マルチチュードの潜勢力に人間の主体性の復興はかかっているのかも知れない。

(7) <帝国> - 「マルチチュード」論と<福祉社会学>研究

私が依拠するブルデュー社会学の教えの一つは、社会の生きた現実を把握しようとした時、それを捉えるのに相応しい新しい概念を必要とするということであった⁷⁹⁾。ハビトゥス、構造、実践、社会関係資本、文化資本、象徴資本、誤認、相同性等々のブルデュー社会学の諸概念が

いかに有効な概念であったかは立証済みのことである。それと同じように、今日の世界状況を適切に把握するためには、それに相応しい諸概念が必要なのであって、ネグリとハートの<帝国>と「マルチチュード」概念は、そうした概念であることを、まずわれわれは理解する必要があると考える。実際、ネグリとハートはブルデューと全く無縁ではなく、かなりよく理解していたであろうことは、具体的にブルデューの考え方を評価しているところからもうかがい知ることが出来るのである⁸⁰⁾。

ネグリとハートが従来の国民国家をベースとする「帝国」概念を批判して、世界全体を統治する主権権力を持った<帝国>という新たな概念を定立し、同時に、これに抗する「マルチチュード」概念を構築して、その間のダイナミックな関係で現実の世界を把握するという方法は、今日の「現代社会」把握の方法に他ならない。その場合、両者の関係は、潜勢力としての「マルチチュード」こそが実は論理的には先にあり、その現勢化との関係で、それに支えられて<帝国>が存在するようになるのであって、この構造的把握の仕方は、現代社会の様々な下位次元の「社会」把握にも適用されるうることとなる。このことは、われわれにとって、<福祉社会学>の前提としての「現代社会把握の方法」として、まずもって、銘記しておくべきことと考えられるのである。

福祉の領域への適用は、まず何よりも、利用者といわれている福祉の「当事者」の存在と「マルチチュード」との相同性として把握されよう。その場合、<帝国>との相同性は、今のところでは、もちろん国家だが、<帝国>に繋がる国家および一国内の経済団体、行政機構、政策立案・実施機関、ということになる。そして、それらに繋がる方策施設、事業者、ならびにサービス提供専門家集団等々は、まさに市

民社会レベルでの当事者との構造関係で、〈帝国〉に繋がるものとしてか、それともそれに抗するものとしてかという、二つの性格のどちらかが問われることとなる。

そのような社会における全般的な構造的把握とともに、とりわけ、社会によって例外状態の如くにされてきた、あるいは現にされている、重度・重症の「当事者の中の当事者」の存在に根源的な人間存在の意味を見出し、その「ホモ・サケル」の論理に基づく根底的な批判と、その存在を社会に包摂しうる新たな理論と実践の構築が求められることとなるであろう。

実際、福祉資本主義が、当然のことのように一般化しているけれども、「格差社会」が進み、「下流社会」とさえいわれて⁸¹⁾、不平等が問題となる中で、アメリカでも、先にも触れた『残忍な国家—福祉資本主義と不平等—』という著書⁸²⁾では、資本主義国家における資本主義的福祉国家の衰退を論じ、それに対するオルターナティヴを探求し、社会的連帯の必要性が主張されているのである。その連帯の問題は、デュルケム以来、社会学が当初から扱ってきたテーマであって、別の著書⁸³⁾に拠れば、まさに贈与論との関係が問われているのである。それは、福祉資本主義の矛盾を解決するために、避けられない論点であると思われる。実際、贈与の問題は「普遍経済」と密接不可分であって、「世界社会フォーラム」の開催地ポルトアレグレにおける「参加型予算プロジェクト」と呼ばれる連帯経済は、利潤を目的としない経済活動として注目に値する⁸⁴⁾。

本稿の「はじめに」でも述べた、『ハイパーモダンの時代』という本は、ポストモダンを批判しているのだが、だからといってモダンに戻るのではなく、流行現象をはじめ、社会・文化的領域での今日の問題は、もはやポストモダニティの矛盾、すなわち自律と依存の矛盾、個人

主義の論理そのものと伝統的ノーマライゼーション構造の崩壊という個人主義の本質のパラドックスが、どうにもならないように、社会全体に遍在するようになってきたからで、もはやポストモダンさえ超えて、ハイパーモダンの時代として捉えることを主張しているのである⁸⁵⁾。

こうした時代状況の中で、福祉の当事者は、まず、マルチチュードであることをいかにして自覚し、組織化し、活動しうかが問われることとなる。それは、『マルチチュード』上巻のところで指摘された農民の場合と同じだが、「ホモ・サケル」の論理をもって一般の誤認を解きつつ、その他のマルチチュードである諸団体、諸組織との特異性と共通性を確認し、「構成的権力」の主体として、連帯の中で成長することである。ここでも、市民社会が、グローバル・ガバナンスが時代の傾向として力を持つようになるなかで、〈帝国〉に飼い馴らされた公共的組織となるか、それとも、オルターナティヴな〈共生〉を可能にする〈共〉的組織となるかが問題となるのと同様である。当事者の中には、身体障害者のように、既に世界的な自立生活運動の経験をもっているものも存在しているが、労働者とはもちろん、女性、高齢者、知的障害者、精神障害者、失業者、ホームレス、などとの〈共生〉的あるいは〈共〉的連帯を確立していくことがこれからの課題となることが示唆されるのである。そのとき、市民社会の構成員である市民は、それと連帯しうる市民としてみずからを自覚し、生成発展していくことが求められるこというまでもない。

そして、世界的な「マルチチュード」の運動に対して、日本の中から、連帯の発信が出来るようになることが期待される。それは、内橋克人や佐野誠もいわれているように⁸⁶⁾、「もうひとつの日本は可能だ」として現状を超えて、その面で、世界に後れをとらない道を探る必要が

あろう。

最後に、〈帝国〉-マルチチュード論を通じて、世界全体に流れている時代の潮は、大きく二つあることが明らかとなった今、本当に世界の平和と安寧に繋がるような福祉の道は、少なくとも、今のままであってはならないということは、はっきりいえることであろう。この「現代社会」の全体構造認識を前提にして、われわれが日常生活しているこの国の福祉を真に〈福祉社会〉というに相応しい〈社会〉の福祉に変えていく道は、「マルチチュード」的な当事者主体の運動を通じて、元来当事者であるべき人々が「マルチチュード」の自覚を持つように意識改革をすること、そして多くの人々に承認してもらえるように努力することで、その構成的権力を生成し、発展させていくことである。しかし、真の民主主義が絶対的民主主義であるならば、ノーマライゼーションの矛盾をも直視して超えていかなければならないし、主権そのものの根底的批判こそが目指されるべきなのだから「当事者主権論」をも超えて、真の平和と民主主義の実現—人類普遍の愛と希望の道—に向っていかなければならない。

いずれにせよ、思想と理論と現実の二つの大きな流れの中であって、当事者性とリフレキシビティを観点にもつ〈福祉社会学〉は、まずは国内の身近な生活の現実から取り組み、足下から二つの流れの歴史的な止揚の方向に向けていくという、その存在意義と可能性に展望が得られたように思うのである。

おわりに

かつて80年代末に、社会科学の地殻変動といわれたことがあったが、〈帝国〉-マルチチュード論の登場こそ、地殻変動のように思われてならない。今度は、理論の方法上だけでなく、社会の土台のところから起こっているもののよ

うに思われてならない。それだけ、世界の危機が深刻であり、理論のあり方が真剣に問われているためであろう。

大変な問題に取り憑かれてしまい、ここ数ヶ月間は本を買い漁り、読み続け、そして、ワープロと対話しながら、老骨に鞭打って格闘してきた。しかし、すべての帝国論を収集し切れないまま発車してしまい、また、検討出来ずにしまった問題が沢山残ってしまった。一体、マルチチュードの現実と未来はどうか、また、マルクス主義とポスト構造主義を繋ぐためには、ジジエクを再考する必要があるし、民主主義の何たるかに関係して「非—全体」の問題が解かれなければならない、などの問題⁶⁷⁾である。残された課題は、なお引き続き追究していきたいと思っているが、他日を期したい。それでも、長い間、足踏みしてきてしまった歩みを、これでまた、歩み出す勇気が湧いてきたことは確かであって、今後も努力していきたいものと思う。

(注)

- 1) Michael Hardt and Antonio Negri, *Empire*, Harvard University Press, 2000. (アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート著、水嶋一憲・酒井隆史・浜邦彦・吉田俊実訳『〈帝国〉—グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性—』以文社、2003年) ; Michael Hardt and Antonio Negri, *Multitude: War and Democracy in the Age of Empire*, The Penguin Books, 2004. (アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート著、幾島幸子訳、水嶋一憲・市田良彦監修『マルチチュード—〈帝国〉時代の戦争と民主主義—』(上)、(下)、日本放送出版協会、(NHKブックス) 2005年)。
- 2) 拙稿「“Reflexivity” 概念と福祉社会学研究」明星大学社会学研究紀要、第22号、2002年に挙げた資料のほか、ブルデュー没後の資料として

は、Pierre Bourdieu, *Esquisse pour une auto-analyse*, Édition Raisons D'agir, 2004; Pierre Bourdieu, *The Social Structures of the Economy*, Polity, 2005; David L. Swartz and Vera L. Zolberg (eds.), *After Bourdieu: Influence, Critique, Elaboration*, Kluwer Academic Publishers, 2004; Deborah Reed-Danahay, *Locating Bourdieu*, Indiana University Press, 2005など。また、キデنز、ベック、ラッシュのその後の資料としては、とくに、Anthony Giddens, *Beyond Left and Right: The Future of Radical Politics*, Polity Press, 1994. (アンソニー・ギデنز著、松尾精文・立松隆介訳『左派右派を超えて－ラディカルな政治の未来像－』而立書房、2002年); Ulrich Beck, *World Risk Society*, Polity Press, 1999. およびウルリッヒ・ベック著、島村賢一訳『世界リスク社会論－テロ、戦争、自然破壊－』平凡社、2003年; Ulrich Beck, Translated by Patrick Camiller, *What is Globalization?*, Polity Press, 2000. (ウルリッヒ・ベック著、木前利秋・中村健吾監訳『グローバル化の社会学－グローバリズムの誤謬－グローバル化への応答－』国文社、2005年) などである。

3) ウィリアム・F. フィッシャー & トーマス・ポニア編、加藤哲郎監修、大屋定晴・山口響・白井聡・木下ちがや監訳『もう一つの世界は可能だ－世界社会フォーラムとグローバル化への民衆のオルタナティヴ－』日本経済評論社、2003年; スーザン・ジョージ著、杉村昌昭・真田満訳『オルター・グローバリゼーション宣言－もう一つの世界は可能だ！ もし……－』作品社、2004年; ジャイ・セン、アニタ・アナンド、アルトゥーロ・エスコバル、ピーター・ウォーターマン編、武藤一羊・小倉利丸・戸田清・大屋定晴監訳『世界社会フォーラム 帝国への挑

戦』作品社、2005年; 村岡到編『＜帝国＞をどうする』白順社、2005年など参照。

- 4) 筆者の構想する福祉社会学は、とりあえず、山括弧で括って示すことにしている。
- 5) フランシス・フクヤマ著、渡部昇一訳『歴史の終わり』上、下、三笠書房、新装新版2005年。なお、多くの帝国論者は、フクヤマの理論に対して批判的である。
- 6) 今田高俊『モダンの脱構築－産業社会のゆくえ－』中公新書、1987年; 千石好郎編『モダンとポストモダン－現代社会学からの接近－』法律文化社、1994年; 友枝敏雄著『モダンの終焉と秩序形成』有斐閣、1998年; 森元孝著『モダンを問う－社会学の批判的系譜と手法－』弘文堂、1995年; 見田宗介著『現代社会の理論－情報化・消費化社会の現在と未来－』岩波書店(岩波新書)、1996年。など参照。
- 7) ラッシュのブルデューについての言及は、スコット・ラッシュ著、田中義久監訳『ポスト・モダニティの社会学』法政大学出版局、1997年、の終章(第9章)をみられたい。
- 8) Gilles Lipovetsky & Sébastien Charles, translated by Andrew Brown, *Hyper-modern Times*, Polity Press, 2005.
- 9) 「ホモ・サケル」(homo sacer) とは、「聖なる人間」のことであるが、殺害可能かつ犠牲化不可能な生であって、元はローマの古法からくる。親に危害を加えたり、客人に不正を働いたりした者を処罰しようとするにあたって、その者をこう呼んでいたという。ジョルジョ・アガンベン著、高桑和巳訳『ホモ・サケル－主権権力と剥き出しの生－』以文社、2003年。なお、アガンベンは、ホモ・サケルとは例外状態におかれた「剥き出しの生」を指し、それと主権との関係構造とその論理を解き明かしている。第一部、第二部参照。
- 10) スティーヴン・ハウ著、見市雅俊訳『帝国』

岩波書店、2003年、44頁。

- 11) 藤原帰一著、『デモクラシーの帝国—アメリカ・戦争・現代世界—』岩波書店（岩波新書）、2002年、7頁。
- 12) ハウ、前掲訳書の他、山本有造編『帝国の研究』名古屋大学出版会、2003年；マイケル・イグナティエフ著、中山俊宏訳『軽い帝国—ボスニア、コソボ、アフガニスタンにおける国家建設—』風行社、2003年；エレン・メイクシンズ・ウッド著、中山元訳『資本の帝国』紀伊国屋書店、2004年など参照。
- 13) 山内昌之著『帝国と国民』岩波書店、2004年、2頁。
- 14) イグナティエフ、前掲訳書、10頁。
- 15) ノーム・チョムスキー著、山崎淳訳『9.11—アメリカに報復する資格はない！—』文藝春秋、2001年；ノーム・チョムスキー著、海輪由香子他訳『テロの帝国アメリカ 海賊と帝王』明石書店、2003年；ジョン・ニューハウス著、中谷和男訳『帝国アメリカ—ブッシュが世界秩序を破壊する—』河出書房新社、2004年；マイケル・マン著、岡本至訳『論理なき帝国』NTT出版、2004年；ズビグニュー・ブレジンスキー著、堀内一郎訳『孤独な帝国アメリカ—世界の支配者か、リーダーか？—』朝日新聞社、2005年；デヴィッド・ハーヴェイ著、本橋哲也訳『ニュー・インペリアルイズム』青木書店、2005年など参照。
- 16) アラン・ジョクス著、逸見龍生訳『＜帝国＞と＜共和国＞』青土社、2003年。なお、本稿では、ネグリとハートの＜帝国＞と区別するため、ジョクスの論の場合は、「帝国」とカギ括弧で表示することとする。
- 17) 『ビヒモス』は、1668年、ホッブズ80歳の時書き、1682年に刊行された革命史（『世界の名著28ホッブズ』中央公論社、1979年による）、邦訳は見当たらない。
- 18) ピエール・ブルデュー著；加藤晴久編集・構成／訳『ピエール・ブルデュー来日記念講演2000』藤原書店、2001年参照。
- 19) エマニュエル・トッド著、石崎晴己訳『帝国以後—アメリカ・システムの崩壊—』藤原書店、2003年。なお、『環』の小特集『『帝国以後』は世界でどう読まれたか』およびトッドの来日シンポジウム（『環』藤原書店、Vol.18, 2004）を参照されたい。
- 20) ジャック・デリダ&ユルゲン・ハーバーマス、瀬尾育生訳「われわれの戦後復興—ヨーロッパの再生」、『世界』2003年、8月号。なお、デリダとハーバーマスの接近については、ユルゲン・ハーバーマス、ジャック・デリダ、ジョヴァンナ・ボッラドリ著、藤本一勇・澤里岳史訳『テロルの時代と哲学の使命』岩波書店、2004年、も参照されたい。
- 21) 以上の文献については、山内昌之・増田一夫・村田雄二郎編『帝国とは何か』岩波書店、1997年、および山内昌之、前掲書；山本有造、前掲書；藤原帰一、前掲書；のほか、紀平英作編『帝国と市民』山川出版社、2003年；松本彰・立石博高編『国民国家と帝国—ヨーロッパ諸国民の創造—』山川出版社、2005年；本山美彦編『「帝国」と破綻国家—アメリカの「自由」とグローバル化の闇—』ナカニシヤ出版、2005年；齊藤日出治著『帝国を超えて—グローバル市民社会論序説—』大村書店、2005年；大澤真幸著『帝國的ナショナリズム—日本とアメリカの変容—』青土社、2004年、参照。
- 22) 渡邊啓貴著『ポスト帝国—二つの普遍主義の衝突—』駿河台出版社、2006年；山下範久編『帝国論』講談社、2006年。
- 23) ネグリ&ハート、前掲訳書（2000）3頁。
- 24) ホッブズ著、水田洋訳『リヴァイアサン』（一）、（二）、岩波文庫、1954年、1964年；ジャン・ジャック・ルソー著、桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』岩波文庫、1954年、参照。

なお、ホッブズとルソーの論はこうした一般的意味を超える奥深い意味をもっており、検討を要することはいうまでもない。

- 25) ネグリ&ハート、前掲訳書、とくに、第二部、2-6 (237~267頁) 参照。
- 26) 同上、第四部、4-3 (488~512頁) 参照。
- 27) 同上、第一部、1-2 (39-63頁) 参照。
- 28) 同上、8頁。
- 29) 以上の第四点にいられている「生政治」概念は、フーコーの「生権力」からくるものであり(ミシェル・フーコー著渡辺守章訳『性の歴史 1 知への意志』新潮社、1986年、第5章とくに176~177頁、およびフーコー「統治性」(『ミシェル・フーコー思考集成Ⅶ』筑摩書店、2000年、所収)、フーコー「生体政治の誕生」(『ミシェル・フーコー思考集成Ⅷ』2001年、所収)を参照)、新たな民主主義とは、後述するように、「絶対的民主主義」として追究されたスピノザ以来のものである。また、「構成的権力」については、アントニオ・ネグリ著、杉村昌昭・斉藤悦則訳『構成的権力—近代のオルタナティブ—』松籟社、1999年を参照されたい。
- 30) ここでの「規律社会」、「管理社会」というのは、フーコーとドゥルーズの社会把握の基本的な概念であり、「非物質的労働」はネグリとハートのポストモダン状況における労働の性格を表わす基本概念である。また、「機械」概念は、ドゥルーズ=ガタリの『アンチ・オイデプス』および『千のプラトー』(後掲の注65) 参照)を貫く思想のキー概念である。
- 31) ドイツの作家、ハンス・グリンメルスハウゼンによる17世紀の小説 *Der abenteuerliche Simplicissimus* (『阿呆物語』望月市恵訳、上、中、下、岩波文庫、1953~4年)の主人公の名を採ったもの。
- 32) 以上のマルチチュードに関してみられる諸概念も、思想史上追究されてきたものとして、極

めて重要であることに注意する必要がある。とくに、「肉」については、メルロ・ポンティの『見えるものと見えないもの』(滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1989年)におけるキー概念に由来するものである。また、マルチチュード概念については、とくに、西谷修・酒井直樹・遠藤乾・市田良彦・酒井隆史・宇野邦一・尾崎一郎およびトニ・ネグリ、マイケル・ハート共著、『非対称化する世界—『〈帝国〉』の射程—』以文社、2005年、中のネグリの論文「マルチチュードの存在論的定義に向けて」が明快で説得力があるので、参照されたい。

- 33) 1990年代に、イタリアで活動した活動家たち(白いツナギ=作業)のこと。メキシコのサバティスタの英雄サバタの白い馬は彼らのシンボルにもなり、メキシコシティからヨーロッパに戻り、何回も抗議行動を行ったが、ジェノヴァでの抗議行動の後、自分たちのようなグループがマルチチュードの運動のリーダーとして行動する時期は終わったとして、解散を決めたという。まさに、特異な存在であって、マルチチュードの注目すべき特質の一面を物語っている。
- 34) 「世界社会フォーラム」については注3)で挙げた資料のほか、「ボルトアレグレ2002—マルチチュードたちの労働—」(『インパクション』130号、2002年; 北沢洋子「世界は地の底から揺れている」『世界』2004年4月号pp.99~116; 丸山重威「新自由主義がもたらす社会問題にどうこたえるか」『関東学院法学』第14巻、第1号、2004年、35~79頁、などがある。
- 35) Alex Callinicos, *Against the Third Way*, Polity, 2001. とくに、Ch.4, pp.97~120.
(中谷義和監訳、吉野浩司・柚木寛幸訳『第三の道を越えて』日本経済評論社、2003年。)
- 36) Pierre Bourdieu, *Contre-feux*, *Liber-Raisons D'agir*, 1998. (邦訳は、加藤晴久訳=解説『市場独裁主義批判』藤原書店、2000年。)

- 37) 武藤一羊「本書を読まれる日本の読者に—監訳者きえがき」(ジャイ・セン他、前掲『帝国への挑戦』、1～11頁) 参照。
- 38) 前掲注3) の文献および北沢洋子、丸山重威の前掲論文参照。なお、サバティスタはメキシコの先住民運動から発展した民族解放軍の運動(『マルチチュード』上、152～153頁参照)、ナルマダ運動はインドの巨大なナルマダ・ダム建設反対運動(『マルチチュード』下、154～155頁参照)、ジュビリー2000はキリスト生誕2000年までに貧しい国々の「債務を帳消しにしてやろう」という国際キャンペーン。
- 39) フィッシャー&ボニア編、加藤哲郎監修、前掲訳書、443～446頁
- 40) とくに、前掲『帝国への挑戦』第3部「WSFをめぐる論議—批判的関与」を参照。また、スーザン・ジョージ、前掲書のように、「もうひとつの世界は可能だ」としても、「もし…」という条件付きであることも考えてみなければならぬであろう。ただし、それに対して、村岡(前掲訳書、あとがき)は批判的だが、多様な意見をまとめていくことはフォーラムにとって大きな課題であって、そのプロセスで、異論も受け入れ、多に議論していく必要があろう。
- 41) フィッシャー&ボニア編、加藤哲郎監修、前掲訳書の「序文」参照。
- 42) たとえば、「特集：帝国—グローバリゼーションへの新視角」『現代思想』Vol.29-8, 2001年; 「特集：『帝国』を読む」『現代思想』Vol.31-2, 2003年、など。
- 43) たとえば、代表格の山内氏さえ、このような見方で述べている(とくに、山内昌之、前掲書、5頁)。また、藤原帰一の場合も、マルチチュードの存在を全く無視して、ネグリとハートの<帝国>とアメリカの民主主義帝国とを同一視している(前掲書、18頁参照)。
- 44) ジョクスは、すばらしい分析にもかかわらず、ネグリ&ハートの『<帝国>』に対しては冷淡な批評をしている(前掲訳書、「訳者あとがき」中のインタヴュー、とくに289～290頁参照)。
- 45) 齊藤日出治、前掲書、参照。
- 46) 馬場宏二「アメリカ帝国主義の特質」『季刊経済理論』第41巻3号、2004年、14～24頁。とくに、14、22～23頁参照。なお、*Multitude*の裏表紙には*Empire*について国際的ベストセラーであるとのコメントが記載されている。
- 47) 村井明彦「新しい帝国、米国とその危機」(本山美彦編、前掲書、第六章、184～233頁)。
- 48) 拙著『生活の構造的把握の理論—新しい生活構造論の構築をめざして—』川島書店、1996年、および拙前掲論文(2002)を参照されたい。
- 49) マイケル・ハート+長原豊「討議 帝国を超えて 遍在する反乱」『現代思想』31-(2)、2003年、46～93頁。肝心な論点を鋭く突いて、ハートに勝るとも劣らない長原の論客振りに感銘させられる討議である。
- 50) 西原和久「マルチチュードという可能性—グローバル化時代における社会理論の冒険—」『現代社会理論研究』第14号、2004年、518～522頁。
- 51) 川原彰「<グローバルな市民社会>とマルチチュード—グローバル・デモクラシーの構成的次元—」(星野智編著『公共空間とデモクラシー』中央大学出版部、2004年、10章、207～233頁)。
- 52) 川原彰「<帝国>とグローバル・ガバナンス—グローバルな政体構成と民主主義—」(『内田孟男・川原彰編著『グローバル・ガバナンスの理論と政策』中央大学出版部、2004年』第三章、71～98頁)。
- 53) イマニュエル・ウォーラースティン著、山下範久訳『時代の転換点に立つ』藤原書店、2002年、およびイマニュエル・ウォーラースティン著、山下範久訳『世界を読み解く 2002～3』藤原書店、2003年、参照。

- 54) ジョヴァンニ・アリギ「帝国の発展路線―世界システムの転換―」(トマス・アトゥツェルト&ヨスト・ミュラー編、島村賢一訳『新世界秩序批判―帝国とマルチチュードをめぐる対話―』以文社、2005年、4～27頁)。引用は、26頁。なお、「市民権収入」とは、マルチチュードのプログラムに基づいた政治的要求の一つである社会的賃金と保証賃金の要求に応じた保証収入のことである(『＜帝国＞』500頁参照)。
- 55) ヨアヒム・ヒルシュ「新しい世界秩序―国家の国際化―」(同上書、28～47頁。)
- 56) 中西輝政著『帝国としての中国』、東洋経済新報社、2004年、も出されているが、アメリカ「帝国」に対する「帝国」としての中国とか＜帝国＞の認識はない。しかし、中国の大国としての存在が＜帝国＞状況にどう影響してくるかは注目すべきところであろう。
- 57) アレックス・カリニコス著、渡辺雅男・渡辺景子訳『アンチ資本主義宣言―グローバルゼーションに挑む―』こぶし書房、2004年、179～194頁参照。
- 58) 村岡到編、前掲書、53～75頁。
- 59) 的場昭弘「ネグリとハートの＜帝国＞とは何か」(的場昭弘編『＜帝国＞を考える』双風舎、2004年、15～58頁)参照。
- 60) 浅田彰著『構造と力―記号論を超えて―』勁草書房、1983年。なお、この本の評価については、たとえば、橋爪大三郎著『はじめての構造主義』講談社現代新書、1988年、第四章中のブックガイドを参照されたい。
- 61) 「分断の時代　そこにある壁」朝日新聞、2006年1月1日。
- 62) スラヴォイ・ジジェク著、長原豊訳『身体なき器官』河出書房新社、2004年、とくに、366～380頁。
- 63) スラヴォイ・ジジェク、比嘉徹徳訳「現代のレーニン主義―展望」『別冊情況』、情況出版、2005年9月、328～338頁。
- 64) ネグリ&ハート、前掲訳書(『＜帝国＞』)の原注*4(572頁)。
- 65) ジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリ著、宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・宇中高明訳『千のプラトール』河出書房新社、1994年；ジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリ著、市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社、1986年、とくに、87～142頁。
- 66) ジル・ドゥルーズ著、財津理訳『差異と反復』河出書房新社、1992年；ジル・ドゥルーズ&フェリックス・ガタリ著、財津理訳『哲学とは何か』河出書房新社、1997年。なお、「潜勢的なこと」「潜勢性」「現勢化」についてはスラヴォイ・ジジェク、前掲訳書も参照されたい。
- 67) 規律社会については、ミシェル・フーコー著、田村俣訳『監獄の誕生―監視と処罰―』新潮社、1977年、のとくに、第三部を、また、管理社会については、ジル・ドゥルーズ著、宮林寛訳『記号と事件―1972～1990年の対話―』河出書房新社、1992年、とくに、「追伸―管理社会について」(292～300頁)を参照。なお、岡本裕一朗著『ポストモダンの思想的根拠―9・11と管理社会―』ナカニシヤ出版、2005年が明快に解説しているので参照されたい。
- 68) ジル・ドゥルーズ著、宇野邦一訳『フーコー』河出書房新社、1978年；ジル・ドゥルーズ著、鈴木雅大訳『スピノザ―実践の哲学―』平凡社、1994年。
- 69) 三枝博音著『資本論の弁証法』時潮社、1946年、序文参照。なお、弁証法には、レーニン「弁証法の問題によせて」(レーニン著、松村一人訳『哲学ノート』第二分冊、岩波文庫、1956年、所収、195～202頁)は必読の文献であることというまでもない。
- 70) ピエール・マシュレ、桑田禮彰(聞き手・訳)「現代を生きるスピノザ」『現代思想』Vol.24-

- 14, 1996
- 71) アントニオ・ネグリ、水嶋一憲訳「民主制と永遠性」『現代思想』Vol.24-14, 1996. なお、スピノザ自身の理論については、スピノザ著、畠中尚志訳『エチカ』上、下、岩波文庫、1951年；スピノザ著、井上庄七訳『政治論』（『世界の大思想 9 スピノザ』河出書房新社、1966年、所収）参照。
- 72) マルクス著、真下信一訳『ヘーゲル法哲学批判序論 付 国法論批判その他』国民文庫、1970年、とくに、51～55頁参照。
- 73) 新しいプロレタリアートとしてのマルチチュードについては、ネグリ&ハート、前掲訳書『＜帝国＞』、とくに、73～87頁、および『マルチチュード』下巻、3－3「マルチチュードの民主主義」（219頁以降）参照。
- 74) マルクス「ヘーゲル法哲学批判序論」、前掲訳書所収、349～350頁。
- 75) マルクス「ユダヤ人問題のために」、前掲訳書所収、313頁。
- 76) ギー・ドゥボール著、木下誠訳『スペクタクルの社会』ちくま学芸文庫、2003年；ジークムント・バウマン著、森田典正訳『リキッド・モダニティ—液状化する社会—』大月書店、2001年。
- 77) パオロ・ヴィルノ著、廣瀬純訳『マルチチュードの文法』月曜社、2004年とくに、185～211頁参照。
- 78) Alex Callinicos, op. cit. (2001) ; Edward J. Martin and Rodolfo D. Torres, *Savage State; Welfare Capitalism and Inequality*, Rowman & Littlefield Publishers, 2004.
- 79) ピエール・ブルデュー著、今村仁司・港道隆訳『実践感覚 I』みすず書房、1988年、9頁。
- 80) アントニオ・ネグリ著、小原耕一・吉澤明訳『＜帝国＞をめぐる五つの講義』青土社、2004年41～42頁参照。ここでは、ワッカントとベックをも評価している。
- 81) 山田昌弘著『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く—』筑摩書房、2004年；三浦展著『下流社会—新たな階層集団の出現—』光文社新書、2005年。
- 82) Martin & Torres, op. cit.
- 83) Aafke E. Komter, *Social Solidarity and the Gift*, Cambridge University Press, 2005.
- 84) 北沢洋子、前掲論文、115頁。
- 85) Gilles Lipovetsky & Sebastien Charles, op. cit. とくに、pp.3～13 参照。
- 86) 内橋克人著『もうひとつの日本は可能だ』光文社、2003年；内橋克人・佐野誠編『ラテン・アメリカは警告する—「構造改革」日本の未来—』新評論、2005年、参照。ただし、「世界社会フォーラム」への日本からの参加者および参加団体・組織の数はまだ少なく、とくに、障害者関係の団体・組織は参加していないようであって、今後の課題である。
- 87) ジャック・ラカン以来の厳しい解釈上の問題である。とくに、次の2つの論文、ピエール・マシュレ／桑田光平訳「マルチチュードの未来」と、スラヴォイ・ジジック／長原豊訳「非—全体 Pastout 社会的リンクにおける〈対象a〉」（とちらも『現代思想』Vol.33-12、2005年、所収）を参照されたい。

【参考文献一覧】

（省略）…（注）の中の引用・参考文献を見られたい。

（わたなべ ますお、
東京学芸大学名誉教授、元本学科教授）